ある
「負け組科学者」
の
随筆集

著者：　江澤　潔

（2020/10/18）

はじめに

これは、拙著、
『ある「負け組科学者」の人生の記録』（パブリック・ドメインで提供中）、
のいわば付録の一つである。

私の人生に起きた出来事が「何故起きたのか」の背景となるべく、
当時の状況等については上記拙著でできる限り説明したつもりであるが、
もう一つの背景となるべく、様々な物事に対しての私の考え方については
あまり説明できなかった。
その後者を伺い知る「手がかり」として、ここに、対となる二つの付録、

『ある「負け組科学者」の随筆集』
および
『ある「負け組科学者」の詩集』

を、やはりパブリック・ドメインで提供する。
（これはそのうちの一方である。）

読んで頂けると解ると思うが、それぞれ、かなり異なる性格を帯びている。
それは、私の頭の中には**「二人の善人」**が住んでいるからである。

一人は、
「隣近所に住む優しいおじさん」的な「善人」で、
（ゴミ捨て等、）地域社会のルールに忠実に従い、
電車やバスではお年寄りや妊婦に席を譲り、
狭い道で他人と鉢合わせすると道を譲り、、、
といった、世間一般で認識される様な、いわゆる「いい人」である。
一方、
もう一人の「善人」は、もっと「上から」「俯瞰的な視点で」
この国全体、人類全体、あるいは地球全体の将来を憂え、
真剣に問題点の解決策を考えている。
どちらかと言うと、地球環境の保全を優先しがちなので、
「母なる地球」（あるいは**「母なる自然」**）**からの「遣い」**
の様に見なすこともできるかも知れない。

問題に応じて、この二人は意見が一致することもあるが、
意見が相容れないことも非常に多い。
その場合、葛藤が生じることとなり、
人によっては、どちらか一方、特に後者、
を**「悪人」**の様に感じることもあるかも知れない。
でも、
それはあくまでも**「立場の違い」**なのだ。
所詮、**「善」「悪」**と言うのは、
ある立場から見て判断する相対的な価値
であって、
「絶対的な善」などというものは、そう滅多には存在しない。

前置きが長くなってしまったが、
「詩集」の方は、日常生活を扱った作品が多いので、

どちらかと言うと前者の立場で書かれた場合が多く、

「随筆集」の方は、社会問題を扱った作品が多いので、
どちらかと言うと後者の立場で書かれた場合が多い。

（ただし、それぞれ、反対の立場から書かれた作品も幾つかある。）

そこら辺を念頭に置いて読んで頂けたら、
人によってはある作品を読んだ後に感じるかも知れない不快感は、
多少は軽減するかも知れない。
[
いずれにせよ、特に「随筆集」を読まれる際は、
あまり感情的にならずに、
あくまでも理性的、客観的に読まれることをお勧めする。
]

また、これら付録で扱った主題は、
私の（かつての）専門である物理学や遺伝学（＆分子進化学）
から外れたものがほとんどであるので、
如何せん、感想や意見が「素人目線」になってしまっているし、
（特に「随筆集」では）事実誤認も多少あるかも知れない事は、
あらかじめお断りしておく。
[**注意：**
そこに書かれた事は、どうか「鵜呑み」にせず、
自分で用いたい場合には予め真偽をご確認なさることをお勧めする。
そうせずに、誰かが何か「被害」に遭われても、
私は一切責任は取らないのでご注意頂きたい。
]
[
とは言え、素人（あるいは部外者）の視点からの疑問やアプローチが
しばしばある学術分野の革新的前進（breakthrough）のきっかけ
となることを考えると、
「素人目線」の意見だからと言ってあまり侮りすぎない方が良いかも知れない。
]

末筆ながら、
私が「人生の記録」やこの付録も含めた諸々の準備に
予想をはるかに超える時間がかかってしまったのを、
辛抱して支えてくれた家族はもちろんのこと、
親類達、恩師達、指導教官達、受け入れ教官達、
上司達、友人達、同僚達、先輩同輩後輩達をはじめ、
この５２年の間のどこかの期間に私を支えてくれた全ての人々に、
改めて、心の底から、感謝の意を表する。

2020/10/18（日）

江澤　潔

目次：随筆集（Table of Contents：Essays）

「破滅」へのチキンレース

江澤　潔　[着想：???; 書き下ろし：2020/10/14&15&16]

これは、
米国のトランプ政権と中国の習近平政権の間の「覇権争い」の事を言っている訳でもなければ、
米国とソ連（後ロシア）の間の核兵器開発＆保有の競争の事を言っている訳でもない。
ましてや、日本の安倍政権（後、菅政権）と韓国の文在寅政権の間の「意地の張り合い」の事を
言っている訳でもない。

確かに上記の様な事例の方が、
本当は「チキンレース」と呼ぶのにふさわしいのかも知れないが、、、
私がここで論じたいのは、
もっと世界全体で広く（そして恐らくあまり自覚なしに）行われている
「愚かなレース」の事である。

それは**即ち、「経済成長」を巡る、世界中の国々の間の「競争」**である。

昨今の異常気象や新型コロナウィルスの感染爆発等から、
我々庶民は皆、「このままではいけない」と直感では感じている。
その一方で、
テレビや他のメディア等では連日、
お偉いさん達が「経済を成長させなければ、、、」等とわめいている。

私が思うに、
そもそも**「経済成長」による人民生活向上のモデル**というのは、
その成長する経済活動を支えられるだけの
資源、**市場**、そして（その結果生じる廃棄物等に対する）**地球の受容力**
が十分に存在し利用可能である、
という**前提**があって初めて成立する筈である。

しかるに、世界人口の爆発的な増加により、
今や地球上は人間で溢れかえっており、
上述の異常気象や新型コロナ感染爆発は、
もはや地球の受容力が枯渇した（あるいは既に人間の活動は受容力の限界を超えている）
事を知らせる為の**「母なる自然」からの「警告シグナル」**だと、私は感じている。
そして、
これ以上人口を増やせなければ、**市場の拡大も望めまい。**
[
技術革新等で、活動分野をスイッチすることにより、一時的には
「市場の余地」が生じるかも知れないが、人口が増えないならば、
それは所詮、「一時しのぎ」に過ぎない。
]
そして、そうこうしているうちに、**資源も枯渇するだろう。**

つまり、**もはや、世界中の国々が、**
「経済成長」に基づいたモデルの下で競い合っている場合ではないのだ！！
[
「持続可能な成長」なんて言葉があるが、成長を続ければいずれ
地球の受容力の「天井」に到達するのだから、その言葉には矛盾があり、
したがって「そんなのはまやかし」だ、と私は考える。

そして昨今の異常な出来事は、
我々は既に地球の受容力の「天井」に達した（むしろ超えた）
事を示唆している、と私は睨んでいる。
]

このまま、世界中の指導者達が何も考えずに
「経済成長」を競い合っていたならば、
恐らく近いうちに「破滅」が訪れる。

そういう意味で、私は今の状況を、
「『破滅』へのチキンレース」と表現したのだ。

それでは、どうしたら良いのか？
やるべきことは２つある：

（１）**「経済成長」に基づいたモデルからの脱却**；

（２）**（国家間の）「競争」をやめて「協調」を進める。**

（１）については、既に、一つの考えを提示した。（「理想的な社会」”ideal_society.rtf” 参照）
手短にまとめると、
エネルギーや食糧を「自給自足」できる体制を整え、
人工知能（AI）やロボット等の助けも借りて、
「衣食住がタダ同然で手に入る社会」を実現する、
ということだ。
ここでの一番の趣旨は、
「労働の対価として生活の糧（を得るためのお金）を得る」というモデルにこだわる限り、
「経済成長」の呪縛からは解き放たれない筈だから、それ**を捨てる**、
ということであり、
上記社会はそれを実現する為に考えられる一つの手段に過ぎない。

（２）について、手短に説明すると、
「競争」は必ずエスカレートするものであり、人間活動の拡大を招くから、
それをやめて、
これからはむしろ、
世界全体（人類全体）で「協調」して、人間活動を計画的に縮小していかねばならない、
ということである。
[
今はやたらと CO2 排出と海洋プラスチックが問題として取り沙汰されているが、
仮にそれらが解決したとしても、
恐らく次から次へと新たな問題が浮上するであろう。
、、、何故なら、**真の問題は、**
人間活動自身が既に地球の受容力を超えてしまった、
という点にあるのだから、、、。
]
これについては、別のところでもう少し詳しく論じよう。
（「『競争社会』から『協調社会』へ」（”switching_from_competition_to_cooperation.rtf”）参照）

理想的な社会

江澤　潔　[初稿：2018/09/30; 改訂１：2018/12/11;
改定２：2019/01/23; 改定３：2020/10/16]

これまで散散と世の中の（特にヒトの）現状に対して不平不満を述べて来たが、
ここで、**私が思い描いている**（「夢想している」と言った方が正しいかも知れない）
「理想的な社会」について語っておきたい。

当然ながら、**それは「経済成長」を前提とした社会ではない**。
今日、人々は既に（多少の贅沢を我慢しさえすれば）「それなりのお金でそれなりに暮らせる」
状況にいるし、（日本人の「**節約」をよしとする道徳観**とも相まって）
これからは、**「より良い物をより安く」手に入れ**、それを仲間やあるいは知らない人とすら**「シェア」して**、
更には中古品をどんどん**「循環」させていく社会**、
に移行しつつあるのであるから、（現在の政府が躍起となっている様に）
「無理に大衆の消費を煽って、（従来型の大量生産、大量消費による）経済成長を達成する」
事は、どだい無理だと思われる。
[
仮に（今の様に）無茶な「財政出動」で数年間保ったとしても、その後の反動は激しいであろう。
]

従って、目指すべきは「「経済成長」に依存しない社会」である。
[
どうせ今の「（数字だけの）経済成長」」も、
美味しい部分はすべて少数の「富裕層」に吸い取られてしまっているのだから、
我々大衆には何らご利益はない。、、、せいぜい「雇用」を除けば、、、（そしてそれも実際には怪しい）。
]

私の乏しい経済学の知識から考えると、
そもそも何故「経済成長」が必要かと言うと、
政府の立場からは、税収が増える（ので行政サービスにお金が注げる）、
民衆の立場からは、「雇用」および「賃金」が増える、
（そして富裕層は大儲けできる、）
等が上げられるが、
「経済成長」は大抵「（ゆるやかな）インフレ」を伴うので、
「賃金の増加」自体は、そのインフレである程度相殺されてしまう。
そして、「賃金の増加」の効果自体は、実は**「デフレ」**でも実現できる。
何故なら、商品が安くなるからである。（ただし、ずっと続くと賃金も「雇用」も減る。）
「デフレ」で一番困るのは、**借金**している人々であり、（多額の借金を抱えた）政府もこれに含まれる。
何故なら、（借りている）お金の価値がどんどん上がっていくからである。
（だから、民衆目線では、（雇用問題を除くと）デフレは全然問題でなく、むしろ好ましい事なのに、
やたらと政府が「デフレ脱却」をスローガンとして掲げているものと思われる。）
[
ちなみに、**「デフレ」**は、実際には、政府や日銀が言う程悪くはないのかも知れない。
たとえば、現在**外国人による日本国内旅行**や「爆買い」等が増え、
また、**輸出**が相変わらず好調なのは、
「デフレ」が長年の間続いた結果、
日本産の商品やサービスの価格が安く抑えられて来たのも紛れもない一因であろう；
単に、外国為替レートの（円安方向への）「修正」だけでは、
この様なことにはならなかったかも知れないのだ！

]

従って、民衆の立場からは、
「経済成長」の真のご利益というと、「雇用の増加」ということになるかと思うが、
そもそも、
日本で大多数の人々が「雇用」されて「賃金」を支払われる事によって生計を立てる様になったのって、いつからだろうか？
私の理解が正しければ、
それはそんなに古いことではなく、戦後の高度経済成長期以降の事だと思われる。
つまり、**その様な「社会様式」はまだ５０〜６０年くらいしか経っていない**のであるから、
それを「永遠に続く」かの様に錯覚して今後も踏襲したり、それに完全に適応しようとしたりするのは危険である。
とりわけ、昨今の科学技術の発展は目覚ましいし、世界情勢も猫の目のように変化しているのであるから、
１０年後、ひょっとしたら５年後、には社会様式がとんでもなく変わっている可能性すらある。

さて、**私の考える「理想的な社会」**では、
基本的には、この、（今我々が「常識」のように思っている）
「雇用」して「賃金」を受け取って「生計」を立てる、
という方式をなくしてしまう。
それには、どうしたら良いか？
上記で、「賃金の増加の効果はデフレでも実現出来る」と言ったが、
それを極限まで進めると、

「もしも衣食住が「タダ同然」で確保できるならば、雇用される必要がなくなる」

という事になる。
つまりは、**「衣食住が『タダ同然』で手に入る社会」**を実現してしまえば良いのである。

私の考えでは、
その一番のカギとなるのが、**「エネルギーの確保」**である。
エネルギーはこれまで日本の一番弱い分野で、ある意味では、
石油や石炭、天然ガスなどの**エネルギー源**（および**食料**）を海外から**輸入**せざるを得ない為に、
我々（の先祖達）は苦労して２次３次産業を発展させて来たと言っても過言ではない。

だから、**エネルギーさえ自給自足出来れば、**大きなハードルがクリアできたと言えよう。
日本には資源がないのであるから、それを可能にするには、
太陽光発電などの**再生可能エネルギー**を十二分に活用するしかない。
私は、すべての家屋や多くの空き地等に太陽光パネルを設置出来れば、
十分な電力は確保出来るのではないかと思う。
[
それに、水力、風力、潮力、地熱発電など、他の再生可能エネルギーも
組み合わせれば万全である。
]

問題は、
（１）それ（太陽光パネルの全国規模の設置）を可能に出来るだけの十分な**原料**が（自前で）確保できるか？
（２）電力の安定供給の為に必要な**蓄電技術**はどうか？
であり、これらさえクリア出来れば、この構想はかなり実現可能性を帯びるであろう。

（１）に関しては、例えば日本近海の潤沢な海底鉱床＆マンガン団塊等を利用する手もあるかも知れないが、
もしも、シリコン等の半導体を例えば砂から抽出＆精製する技術が可能となれば、もはや何の問題もなくなる

だろう。
[注１：
砂の主成分は珪酸、即ちシリコンの酸化物である。
]
それらが無理そうだったら、例えば、シリコンの代わりに炭素を用いることが出来るようになれば、
日本の豊富な森林資源を利用できるかも知れない。
[注２：
炭素はシリコンと同じIV族（１４族）に属し、グラファイト（黒鉛）やカーボンナノチューブや有機物等
で半導体や太陽電池を実現する研究も行われているらしい。
]

（２）に関してはあまりよく知らないが、現在、活発な開発が行われているはずであり、それに期待しよう。
問題は、全家庭規模で（特に梅雨の間を通じて使えるだけの）蓄電が可能になるだけの
十分な数量が確保できるかどうかである。

[注３：
現在、一家屋に太陽パネルの設置で約２００万円、蓄電設備の設置で約２００万円かかるそうだが、
これではあまりにも高すぎる。
できればこの１／１０、あるいはせめて１／５、くらいになれば一気に普及が進むだろう。
特に、太陽パネルや蓄電設備の設置が DIY でできる様になってしまえば、設置コストは大幅に削減できるだろう。
]

[注４：
近年、山林を切り開いて大規模ソーラー発電施設を建設する事が盛んな様だが、
私はそれには反対である。
山林は、自然災害を軽減したり、CO2を吸収して酸素を作ったりする、貴重な「資源」であり、
仮に「クリーンエネルギー」の生産の為だとしても、その為に山林を破壊するのは「本末転倒」であると私は思う。
ソーラーパネルはあくまでも、
（耕作放棄地や空き地や空き家の屋根も含む）既に「開かれた」土地や建物の屋根・屋上
に設置するべきである。
それに、**「遊んだ土地、建物の有効利用」**こそ、今日の日本に課せられたもう一つの大きな課題であり、
このやり方は、その問題解決への一つの「答え」を与えてくれる。
]

さて、めでたくこれらの問題が克服されて、
エネルギーさえ自給自足できれば、**「衣食」は恐らくどうにかなる。**

まず、**「食」**だが、主な食糧＆食料は、
「隣組」あるいは「町会」等の小さな共同体毎に設置した**「食料工場」**で生産し、
住民にただで配る。
そして**「衣」**についても、恐らく、
綿花や麻、そして絹等は**「栽培工場」**で生産できるようになるだろうし、
化学繊維に関しては、**リサイクル技術**を発達させれば可能となろう。
[
そして、これらの工場は、**AI** で制御した**ロボット**に働かせれば、ほとんど人手はいらなくなる。
]
これらも住民にただで配る。
[

また、これら工場の屋上や駐車場に、**太陽光パネル**を設置して発電すれば、「一石二鳥」だ。
]

[
また、リサイクル技術が十分に発達すれば、**他の資源**も回収効率よく循環されて、
他国からの資源依存度を極限まで減らせるだろう。
]

[
更に、もしも**人工光合成**の大規模化や（ユーグレナ等）**光合成生物の大量養殖**等が
効率的にできる様になったら、最初の太陽光発電のステップを飛ばして、
直接、太陽光から食料や原料が十分に供給できる様になるかも知れない。
]

従って、（特別な贅沢をしたいと思わない限りは）「衣食」も十分確保できるだろう。

最後に**「住」**であるが、この様に「衣食」がタダ同然で手に入れば、
民衆がお金や財産を持つ意味があまりなくなるので、
地価や**家賃**を釣り上げる必要もなくなる。
従って、（「マイホームを持ちたい」等という夢に拘らなければ、）
「住」もただ同然で皆に与える事ができる様になるのである。
[
最近問題になっている**「空き家」**を有効利用できる様に法律を改正するのも良いだろう。
]

かくして**「衣食住」がタダ同然で確保**されれば、
（贅沢を望まない限りは）**「生活費」を稼ぐ必要がなくなる。**
そうすれば、当然ながら、**「雇用」される必要もなくなる**のである。
[
日々の routine work は、必要ならば、**AI** や**ロボット**を積極的に活用する。
人手がいるが専門性の低い仕事は、**ボランティア**あるいは**「持ち回り制」**で賄うことも出来よう。
後は、**非常に専門性の高い仕事のみが「専門家のやるべきこと」として残る**だろう。
なお、同様な事は**行政サービス**に関しても当てはまる。
]

[
このアイディアの優れた点の一つは、
「将来、AI によって雇用が奪われるかもしれない」という「危機的状況」を逆手にとって、
AI を一般大衆の「敵」から「味方」に完全に転換してしまうところである。
]

[
ちなみに、**人間が「生死」を自然の成り行きに任せれば、医療関係の費用も著しく減らせる。**
いずれにせよ、当然ながら、医師や看護師達も「衣食住」はタダ同然で手に入るのであるから、
（薬や設備の費用を除いて）高い**治療費**を請求する必要もなくなる。
]

[
同様に、**教育費**もほとんど要らなくなるであろう。
]

ここまで来ると、（少なくとも）民衆が「経済成長」を望む必要はなくなる。

政府の立場からは、
まず、民衆の「衣食住」がただ同然で保障されるので、
生活補助や**年金**などを支給する必要がなくなるし、
上記で論じた様に**医療費**も非常に低く抑えられるので、
一般会計の支出のうち、現在最も大きな割合を占めている**「社会保障費」**をほぼゼロに出来る。
[
それに、最近よく話題になっている**「最低所得保障（universal basic income、ベーシックインカム）」**は、
実際上「既に給付されている」も同然である。
]
また、
職員に対する**賃金**も安く抑えられるので、予算の他の部分でも支出を大幅に抑えられる。
更には、
日本の**国債**の債権者の多くは国内にいる、そして、
国内では「衣食住」が確保されている、
のであるから、
政府が現在抱えている膨大な借金のうちの大部分を**「棒引き」**してもらえる可能性も出て来る。

かくして、**エネルギーさえただ同然で十分確保できれば**、
「経済成長」に頼らなくても良く、
民衆が「雇用」されて生計を立てる必要もなくなる、
「夢の様な社会」を構築できるかも知れないのである。

「雇用」がなくなると「仕事」がなくなり、**「生きがい」**がなくなるのではないか？
と心配する方々もいるかも知れない。
しかしながら、現実社会では、
「仕事が生きがい」と思っている人々は（幸運な）少数派であり、
大多数の人々は、「仕事」は自分自身あるいは家族を「養う」為、
つまりは「生計を立てる」為、にやっていて、
「生きがい」は別のところに見出している。

それに、むしろ、
「雇用」されなくても「衣食住」が保障される事によって、
人々は、自分の得意な、あるいは興味のある、分野の活動に失敗のリスクを恐れずに挑戦する事ができるので、
「生きがい」は十分に見いだせると思うし、各分野の**「革新的な発展」**はむしろ助長されるかも知れない。
[
どうしても「生きがい」を仕事に求めたい人達は、ボランティアに従事するか、
もしくは資格を取って「専門家に残された仕事」に従事するという道も残されている。
]

更に、もっと良い事には、
「偽造」「データ改ざん」「盗作」等の「不正」を働く動機自体も極端に少なくなるので、
科学技術、芸術、スポーツ等の「清廉かつ公正な発展」が促進されるだろう。
[
清廉かつ公正な発展は、
「業績」に対する「報酬」として、金品や「権力」は与えずに、「名誉」のみ与える事にすれば、
さらに促進されるであろう。
]

問題は、**かつて「社会主義」諸国が陥った様なところ**に行き着かないか？
すなわち、**ヒトの「怠惰な本性」**が首をもたげないか？
という事であるが、、、
現在の**資本主義**でイヤという程見せつけられる**人間の「（欲がらみの）醜い本性」**
と比べればマシだという意見もあるし、
そもそも、**「安定した生活」さえ保障されているならば、**
それ以上「発展」する必要もないのかも知れない。
[
そもそも、
発展や経済成長は、国民全体を豊かにする為に目指すべき物であり、
今の様に、一部の富裕層が私腹を肥すだけの「（数字だけの）経済成長」なんて、
ない方がましなのかも知れない。
]

そして、この様な社会システムが世界に広まれば、
人々は「衣食住」が保障されているので、お互い**争うこともずっと少なくなり**、
ヒトが**地球環境をこれ以上侵蝕することもなくなり**、
更には**ヒトの活動を計画的に縮小することも可能となる。**
こうして、**ヒトも含めた地球上の全ての生物の間で win-win の状況が生まれる**のだ！！

ちなみに、「衣食住」が保障されているこの社会で、
更に、**物品や土地等の「シェア（共有）」**が極限まで進めば、
もはや「金銭」や「財産」を**「所有」「保有」する意味すらなくなる**であろう。
そしてそれは**「情報」**にもあてはまる。
即ち、これまで「情報」の売買によって得られた「金銭」に価値がなくなるのであるから、
「機密」や「秘密」等の情報を保有する意味すらなくなる。
かくして、「情報」すら人々の間で自由に行き交い、
望みさえすれば**誰でも自由に科学技術や芸術等の発展に貢献できる社会**が実現するだろう。
[
しかしながら、**「情報」の「真偽」を判別**する事は依然として**重要な課題**として残るかも知れない。
故意に間違った情報を流した者には厳罰を科すような国際的な仕組みが整備されることが望まれる。
]

、、、以上が、**私の思い描く「理想的な社会」**の概要である。
多くの人々は「なんて荒唐無稽なアイデアなんだ！」と一笑に付す事であろう。
しかしながら、
既に「母なる地球」が人類の行き過ぎた活動に「悲鳴を上げて」いる現在、
一刻も早く人間活動のこれ以上の「拡大」をストップさせ、
むしろ「縮小」させる方向に向かわなければならないのは明白であるから、
何らかの意味で似た様な、**「『経済成長』に依存しない社会システム」**の設計および構築を、
我々は**急がなければならない**のは厳然たる事実であろう。

ここでのアイディアが、
その道の専門家達や世界のリーダー達の真剣な議論および献身的な行動を
引き起こすきっかけとなれば幸甚である。

追記（2018/10/05; 2018/10/17 改定）：
ちなみに、「理想的な社会」の関連でググッてみると、

幾つか多少似た様な（しかしながら著しく異なる）概念が
既に提唱されている様である：

Degrowth - Wikipedia（https://en.wikipedia.org/wiki/Degrowth）

Basic income - Wikipedia（https://en.wikipedia.org/wiki/Basic_income#Bad_behavior）

追記（2020/10/16）：
奇しくも、
今年に入って**世界的に感染爆発**した**新型コロナウィルス**が、
現在の、
「人々が『雇用』されて『賃金』を支払われる事によって生計を立てる」社会様式
の脆（もろ）さを露呈させた。
今回の世界的感染爆発は、実は、
「もうそんな社会様式はとっととやめろ！」
という、
「母なる自然」（あるいは**「母なる地球」**）**からの「督促状」**だったのかも知れない。

「競争社会」から「協調社会」へ

江澤　潔　[着想：???; 書き下ろし：2020/10/15&16]

今の世界は、概して、**「競争社会」**だと言える。

これは、
仕方がないと言えば仕方がない事かも知れない。
何故なら、
現在、世界中のほとんどの国では**「資本主義」**を採用しており、
「競争」は「資本主義」の基本原理の一つだからだ。

こうなってしまった一つのきっかけは、３０年近く前の、
ソ連をはじめとする「東側陣営」の崩壊であろう。
これにより、西側のリーダー達は、
「社会主義はうまくいかないことが証明された」
とか、
「資本主義が正しいことが証明された」
の様なプロパガンダを積極的に発し、
民衆もなんとなくそれに「洗脳」されてしまった様なところがある。
[
これに関しては、私は明確な異議を抱いているが、それについては
以前に論じた（「『ゆとり教育』と『社会主義』」（”education_without_cramming"&"socialism".rtf）参照）ので、

ここでは繰り返さない。
]

そして今、残った「資本主義」、
あるいはもっと正確にいうならば
「経済成長」に依存した「資本主義」、
も立ち行かなくなってきている。

これは、ある意味、当たり前のことである。
我々が住むこの**地球は有限**であり、
経済活動も物理的には地球を土台にして行われるのであるから、
経済が成長し続ければそのうち「天井」にぶち当たるのは、
ごく当然の帰結と言える。
既に、**この地球上には人類が溢れかえっており**、
アマゾンの熱帯雨林を始め、この地球上の至る所で
「乱開発」が進み、**今や、我々の「母なる地球」は満身創痍である。**
昨今の異常気象や新型コロナウィルスの世界規模の感染爆発等は、
恐らくは、
我々人類の活動を包み込むのに必要なだけの「母なる地球」の受容力が
もはや「底をついた」ことの兆候であろう。

従って、人類が今後も長く存続する為には、
もう、**「経済成長」に依存した社会体制から、脱却しなければならない**のだ。
それどころか、
今でも恐らく「母なる地球」の立場から見れば、
既に人類は「定員オーバー」である筈だから、
これからはむしろ、積極的に、**世界規模で人口を減らし、**
また、経済も含む生活活動も縮小させる必要がある筈なのだ。

それにも関わらず、日本はもちろん、世界中のお偉いさん達は、
「経済成長」「経済成長」とわめき散らし、
本来ならば喜ぶべき筈の、日本の人口縮小を
まるで「悪いこと」であるかのごとく憂えている。
（まあ、「高齢化」が問題であるのだけは同意するが、、、。）

これらは全て、
もはや立ち行かなくなった社会体制（あるいは経済システム）
にいつまでもしがみついているせいである。

手遅れになる前に、（実は既に手遅れかも知れないが、、、）
我々は一刻も早く、
「経済成長」にも「人口成長」にも依存しない様な社会体制および経済システム
を確立しなければならないのだ！
[
私は、最近よく耳にする「持続可能な成長」という言葉はまやかしだと思っている。
地球が有限である限り、「成長」が「持続可能」であろう筈がないのだ。
]

それでは一体、具体的に、それはどの様な社会体制（経済システム）なのか？

一つの案は既に「理想的な社会」（”ideal_society.rtf”）で示したが、

これはあくまでも洗練されてない「粗案」に過ぎず、
本当にうまくいくかどうかもわからない事だけは注意しておく。

取り敢えず、一つ、確かだと思えることは、
「競争」を基本原理にしてはならない、
という事だ。

「競争」は放っておけば必ずエスカレートして、
人類全体の「活動の拡大」につながる；
それは、我々が目指さねばならない（人類全体の）「活動の縮小」
とは真逆の結果である。
[
唯一、そうならない「競争」があるとすれば、
それは、（従来の様に「稼いだ金額」（それはつまるところ「消費量」につながる）の「競争」ではなく、）
「いかに資源を節約できるか」を「競争」することであるが、
その開発の為に、多大な資源や施設や人材を投入するのであれば、
それは本末転倒となり得る。
]

注意して欲しいのは、
私はここで、「競争は一切してはいけない」と主張しているわけではない、
ということだ。
「競争」したい人はどんどん「競争」すればよい。
ただ、
「競争」の結果によって、
人の人生や、団体あるいは国の命運が左右される様な
社会体制からはもう脱却するべきだ、
と言っているだけである。

もう一つ、大切なことは、
人類全体の**活動を縮小**させる為には、
全ての国家の間での、そして全人類間での、「協調」が欠かせない、
という事である。

いくら、一つの国家、あるいは一つの共同体だけで活動を縮小していても、
周りが活動拡大していたら、何の意味もない。
[
ただし、「最初のモデルケース」を実証実験する際には、
そういう状況は十分ありうる。
そして、実証実験がうまく行って、
周りの国々（あるいは共同体）に納得してもらえたなら、
それを全ての国々に導入していけば良い。
]

また、仮に、国家、あるいは個人の「自由意志」に任せていたら、
もし仮に最初はみんなで「活動縮小」する努力から始めたとしても、
やがて「裏切り者」が現れ、いつの間にか「元の木阿弥」に終わってしまう、
というパターンが一番起こり易そうである。

従って、**（全世界規模での）「規律ある協調」が不可欠**となってくる。

これらは、恐らく、
「自由」「競争」に立脚した「資本主義」の下ではなし得ない
ことである。
だからこそ、**まったく新しい社会体制（経済システム）**が必要となってくる。

こんなことを言うと、
これまで「自由」を謳歌してきた人々からは不満の声が聞こえてきそうであるが、
我々（もっと正確には、我々の近い祖先たち）が自分勝手に振る舞ってきた結果、
「母なる地球」がこの様な「窮状」に立たされてしまったのであるから、
致し方無いであろう。
自分達（正確には自分達の近い祖先）の尻は自分達で拭（ぬぐ）わねばならない。

それに、
私が想像するに、
一旦慣れてしまえば、恐らく大多数の人にとっては、
その新しい社会体制（経済システム）の方が
「暮らしやすい」と感じるのでは無いか？
と思っている。

今の社会の様に、
日々、他人との「競争」にさらされ、
周りに「追いつく」為に必死に情報収拾や自己修練等を続ける状況に、
疲れているのは恐らく私だけではあるまい。
（正確に言うと、私はそんな状況を既に「放棄した」が、
ここでの主題と関係ないのでこれ以上は述べない。）

それから、
いちおう一言（ひとこと）断っておくと、
現社会体制（および経済システム）を維持する、
という「選択肢」もない訳ではない。

ただし、
その時でも、**「母なる地球」が有限である**ことには違いはないのだから、
まず必ず**「対立」「衝突」**が起き、
「居場所」を巡って人々（あるいは国家）の間で
血みどろの争いが繰り広げられるのが日常茶飯事の、
あたかも「修羅界」の様な世界、
がそこには待っていることであろう。
（昨今の、米国のトランプ政権と中国の習近平政権の間の対立は、
その「前哨戦」なのかも知れない。）

すこしばかり「不自由」だが平和な世界と、
「自由」のある「修羅界」と、
どちらを選ぶのかは、あなた達次第である。

「貿易立国」からの脱却

江澤　潔　[着想：???; 書き下ろし：2020/10/16]

現在の日本はほぼ誰が見ても「貿易立国」であろう。
何故なら、
生活に必要な食糧／食料品、エネルギー源はもとより、
工業製品の原材料もほとんどすべて、あるいは少なくとも大多数は、
海外から**輸入**しているからである。

しかしながら、この異常なまでの「海外依存体質」のままでは、
ともすれば**外国から「足元を見られ」**て
交渉等で不利な立場に追い込まれ易いし、
また、何かの紛争に巻き込まれて（それが意図的にせよ事故にせよ）
「兵糧攻め」にでも遭ったら、
それはたちまち**「国家存亡の危機」**となる。

もう一方で、
資源にも土地にも乏しいこの国が「貿易立国」であり続けることは、
「科学技術立国」であり続けることとほぼ等しい。
[
観光も含めたサービス業だけでは（国民すべてを養うのに）不十分だと思うし、
仮に十分だとしても、本質的には、下記同様の「不安定」さは残る。
]
しかしながら、「科学技術立国」であり続ける為には、
日々、科学や工学の最先端で革新的な発明を続けていかねばならない。
しかし、発明というのは所詮「水物」であり、安定して続けるのは難しい。
この、ある意味「**自転車操業」的な状況**は、必然的に不安定であり、
いつ「コケて」もおかしくない危険と隣り合わせの中、
我々は暮らしていかねばならない。

そこで、結局、
この日本という国家**が今後、安定して存続できるかどうか？**
は
「貿易立国」から脱却できるかどうか？
あるいはもっと正確には、
食糧／食料やエネルギー（さらには原材料）の自給自足が
できるようになるかどうか？
にかかっていると思う。

「理想的な社会」（”ideal_society.rtf”）でも述べた様に、
再生可能エネルギー等をフルに活用して、
また、空き地やその他**遊んでいる土地**をフルに活用すれば、
（更には、資源の**リサイクル**のシステムをもっと発達させれば、）
それは原理的には不可能ではないと思う。
ただ、
この国の狭い（そして大方住みにくい）土地のことを考えると、
今のままでは人口が多すぎると思う；
最低でも５千億人、出来たら３千億人くらいにまで
人口を計画的に減らせれば、
（そして労働力の不足を **AI やロボット**を積極的に使ってカバーすれば、）
十分に自給自足が可能になるのではなかろうか。

ただし、諸外国からの「侵略」の危険は常にあるので、
外交努力は欠かせないし、
また、「いざという時」の備えとして、
防衛体制を十分に整えておく必要はあるだろう。

こうして**「貿易立国」を脱却**できれば、
人々が「競争」に日々追われることもなく安心して暮らせる、
「ユートピア」がそこに待っている事だろう。

経済学と環境学の融合

江澤　潔　[着想：???; 書き下ろし：2020/10/16]

実を言うと、**経済学**は、
私が最近になって
ANEX 開発プロジェクトが終了した後で
もし時間＆余力があればやって見たいと一番思っていたことであった。
[
私の「人生の記録」の「補遺K」に記さなかった理由はただ一つ、
私がその専門知識を一切持ち合わせていなかったからである。
]

何故やって見たいと思ったかと言うと、
それは、**この学問分野こそが、これからの人類を救う「カギ」を握っている**
と本気で思っているからである。
[
もう一つ「カギ」を握っているのは、
人々の意識（あるいは考え方）を劇的に変えられる「何か」
であろう。
その「何か」が哲学なのか？宗教なのか？政治家／有名人の一言なのか？
実際の事件なのか？ドキュメンタリーなのか？それとも映画や文学作品なのか？
は私には今の所わからない。
]

私は経済学の専門知識を持ち合わせていないので、
以下、かなり**「当て推量」**で書き進める。
[もし間違っていたら、あらかじめお詫びしておく。]

テレビなどを見ていても、
今日では（昔からそうなのかも知れないが）環境学者達の意見と
経済学者達の意見はほぼ真逆であるように思われる。
[注：

ここで言う「経済学者達」とは、あくまでも政府御用達（ごようたし）の経済学者達
のことであり、必ずしも、この分野の最先端を走っている学者達とは限らない。
]

手短に言えば、
環境学者達は地球（あるいは環境）へのこれ以上のダメージを憂慮して
経済活動（も含んだ人間活動）のこれ以上の拡大を戒めているのに対し、
経済学者達は常に「経済成長」「経済成長」とオウムの様に唱えている。
[
ちなみに、（「言わずもがな」かも知れないが、）私は、
結局「地球あってこその人類」なのだから、まず地球を保全するのは当然である、
と考えているので、
かなり（非常に？）環境学者寄りの立場である。
]

このように、意見が真っ二つに別れる理由は、
要は、お互いが相手の立場、主張をまったく（あるいはほとんど）考慮していないからだと
思われる。

[注：ここからが「当て推量」の可能性が非常に高い！]
とりわけ、
現在使われている経済学のモデルに、
「地球の有限さ」から来る（持続可能な）経済（あるいは人間）活動の「上限」
が設定されておらず、
あたかも人類が無尽蔵に生産、消費、排出／廃棄が可能である、
かのようなモデル設定になっている
のが問題なのではなかろうか？

とは言え、
それでは一体、どこら辺にその**「上限」**があるのか？
を正確に見積もるためには、
経済学および環境学の双方からのインプットと、
どちらにも偏らない立場からの解析が必要となろう。

そこで、私は、この際、
経済学と環境学を融合させた、新しい学術分野を設立してはどうか？
と考える。

そうして、
経済学者と環境学者が腹を割って真剣に議論することにより、
未来の地球と人類を救う解決策を創出するのが狙いである。

とりわけ、
正確に見積もった
経済（あるいは人間）活動の「上限」を設定した経済学のモデルを
用いてシミュレーション等の解析をすることにより、
これまでの政治家達の（経済）政策論議が、
如何に、現実味に乏しく、（将来世代に対し）「無責任」であったか、
も明らかになろう。

こうして、

確固とした科学的な根拠を基にして始めて、
政治家達も、**地球環境にきちんと配慮した経済政策**を、
もっと**自信を持って提案し、推し進めていく**ことができるようになるのだ！！

「ゆとり教育」と「社会主義」

江澤　潔　[初稿：2018/12/24; 改訂１：2018/12/25;
改定２：2019/01/03; 改定３：2020/10/16]

「ゆとり教育」は、狙いは良かったと私は思うが、
残念ながら、不評のまま**「失敗」**に終わってしまった。

私は、「失敗」の原因は、ズバリ、**２つの「準備不足」**にあったと思う。
一つは、「ゆとり教育」用の**教育者の養成**が不十分だった事、
もう一つは、「ゆとり教育」を受けた学生を**受け入れる態勢**が
企業などの「受け入れ」側に充分できていなかった事である。

「ゆとり教育」の「真の狙い」、つまり**「理念」**、は、
（生徒達を必要以上の知識の「詰め込み」から解放することにより、）
生徒達の**「既存知識を運用し、自分自身で考え、判断する力」を培う**事、
であった筈だ。

それは、それまで日本社会に根付いていた**「知識詰め込み型教育」と**
ある種の**対極**を成すものでもある。

その様な「理念」を実現する為には、
かつての教育者養成プログラムを受けた教育者達が
短期間の「研修」を受けた程度では十分ではなく、
（その理念や目標を叩き込むことも含め）
それ用の教育者養成プログラムをきちんと受けた教育者を用意する
必要がある筈である。
[
そもそも「知識詰め込み型教育」の先生が、
どうやって「ゆとり教育」の下でテストを考案したり、
その「理念」に基づいて生徒を評価したりできるのであろうか？
]

それを怠った、もしくは充分に行わなかった、事が、
「ゆとり教育」が失敗に終わった
（、つまり、本来それが目指すべきものとは程遠い、
単なる「詰め込む量の少ない知識詰め込み型教育」に成り下がってしまった、）
主要な一因になった、
と私は思うのだ。

もう一つ、**「受け入れる」社会側**にも大きな原因はあった筈だ。
「ゆとり教育」を受けた生徒達は、
従来の「詰め込み型」人間達からみれば、明らかに**「異質」**である。
そして、人間、特に**日本人、はとかく「異質」な者達を排除したがる。**
その結果、日本人は「ゆとり教育」の**「負の側面」ばかり強調**してきた。
例えば、
円周率、π（=3.14…)、を３桁まで言えない「ゆとり世代」を揶揄したり
であるが、
（1991年に阪大理物を首席卒業した元理論物理学者である）**私から言わせれば、**
（普段から円や球に関する（文字ではなくて）
数値計算を必要とする人々ではない限りは）
そんな事は大した問題ではない。
何故なら、（数学や物理学など）本当に専門的な式計算では、
円周率はπという定数で表記されるからである。
更に加えると、「円周率が言えない」と「ゆとり世代」を揶揄する「詰め込み世代」
の人達のうちどれだけが、円周率と同程度、あるいはむしろそれ以上、に大切な
自然対数の底、e (=2.718…)、を３桁以上覚えているのであろうか？
その様な「〇〇を知っているか否か」は結局のところ、「程度問題」であるし、
今ではそんな知識はインターネット等ですぐに調べられる。

結局、そもそも、「ゆとり教育」で養成されると期待される
「自ら考え、判断出来る人材」
（それはしばしば、上司や社の方針と衝突する事にもつながる）
を積極的に受け入れ、適所に配置する、
という**覚悟や用意**が社会や企業等「**受け入れ側**」にも
出来ていなかったのではなかろうか？

センター試験（その前身は共通一次試験）の様に
「詰め込み型教育」に典型的なテストは、
言ってしまえば、
昔懐かしの「アメリカ横断ウルトラクイズ」や「タイムショック」に代表される様な、
「トリビアクイズ」のちょっとばかり組織化されたバージョンに過ぎない。
こんなくだらない事で、日本人は長年の間、学生達の「優劣」を判定してきた。
[
その中で長年「優秀だ」とされて来た私自身も、
実は、この社会制度の「犠牲者」だったのかも知れない。
]

それは、高度経済成長期の様に（「欧米に追いつけ、追い越せ」と）
「目標」がはっきりしていた時代にはそれなりに機能していたかも知れない。

しかし、**これからの時代に大切なのは、**
（１）インターネット等を駆使して必要な情報を取り寄せ、
（２）情報源、文脈、その他の要素から、その情報の真偽を正しく判定し、
（３）それら情報を駆使して自分自身で考え、判断する、
能力である。

だから、これはあくまで私見であるが、
大学は、とっとと「センター試験」の様な「トリビアクイズ」を止めて、
入試はすべて、文章題と小論文と面接だけにするべきである。

[
もちろん、その為の採点官の養成も必須である。
マニュアル程度では十分に対応できない筈であるから、、、。
]

[
更に私の本音を言うと、
大学入試は「競争型」ではなくて**「資格型」**にして、
「資格」のある（と判定された）生徒はすべて入学を許可し、
その代わり、**進級や卒業をもっと厳しくする**べきである。
「今、日本が米中に後塵を拝しているのは、
この様な、「大学＝人材選びのためのフィルター」程度にしか捉えておらず、
大学で学べる専門知識を軽んじて来続けた日本企業の風土にも原因がある」
と誰かが（確かBS-TBS報道１９３０かBSフジLIVEプライムニュースのどちらかで）
言っていた。
]

私が信じるに、
（知識はインターネットで簡単に手に入るような）今の時代には
「知識詰め込み型教育」はもうほとんど意味がないので、
覚えるのは、物事の真偽を判断するのに必要なほんの**少数の「必須知識」に留めて**、
残りの時間は
その**知識を用いて様々な題材について調べたり考えたりする訓練**に充てるべきだ。

言い換えれば、**「ゆとり教育」を十分に準備してから再開する**べきだ：

この、**「正解が何か？」がなかなか見えてこない「激動の時代」**には、
「優秀なネジ／歯車」を「大量生産」できる「知識詰め込み型教育」よりも、
「優秀なリーダー」を養成できる可能性が高い「（正しい）ゆとり教育」こそが
必要不可欠なのである。

ついでながら、
今から２０年程前に起きた**「社会主義国家」の「崩壊」**も、
「ゆとり教育」の失敗と根っこで通じていると、私は考える。
つまり、（その理念自体は決して悪くはなかったが）**「準備不足」**だったのだと思う。

今から２０年程前、ベルリンの壁の崩壊に続いて
ソ連や東欧諸国で次々と社会主義体制が「崩壊」した。
そしてその際、
西側では「社会主義の実験の失敗」とか「資本主義の勝利」、
更には「共産主義はうまくいかないことの証明」
の様な言葉や見出しが飛び交った。
しかしながら、
これらの言葉は単に**資本主義体制側の「支配者層」**やその御用達の学者やメディア
によるプロパガンダに過ぎない、と私は思っている。

それは何故かと言うと、
ソ連や東欧諸国で実践していた「社会主義」あるいは「共産主義」は、
かつて**マルクスが理想として考えていたそれとはかなり違う物**であった
（むしろ、「出来損ないの資本主義」の様なものだった）だろう、

と（詳細は知らないまでも）推測するからである。

そもそもマルクスが社会主義（または共産主義）を掲げたのは、
「（資本家と言う名の）支配者」による「（労働者という名の）被支配者」の「搾取」
をなくそうというのが目的だった筈だ。
しかしながら、**ソ蓮や東欧諸国**では、
確かに表面的には「資本家」はいなくなったかも知れないが、
リーダーや官僚という「支配者層」は依然として存在し、
彼らが労働者を**「搾取」する**という構図は残り続けた。
そして、支配者層は、**既得権益の甘い汁**を吸い続け、また、
世襲（あるいは教育の機会の不平等などによる「**半世襲**」）等により、
次第に**堕落**し、**腐敗**して行く一方、
（本来自分らの存在意義である筈の）民衆（＝労働者）の生活向上への
献身・努力を怠ってきた。
それが、民衆の不満の蓄積につながり、
ベルリンの壁の崩壊で一気に爆発したのであろう。

この「失敗」のもう一つの要因は、
西側の**資本主義諸国と「冷戦」**と呼ばれる程の対立関係になってしまった為に、
物資や情報等の行き来が途絶え、
経済や生活の向上の機会が限られてしまった事だと思うが、
これはどちらかと言うと、主に、
資本主義体制の「支配者」達の極端な警戒感のせいだと思う。
[
日本でも、戦前は特に「赤狩り」により、多くの共産主義者達が弾圧されていた。
]
（もちろん、マルクスの「階級間闘争」の考えのせいも幾らかはあるのだろうが、、、。）
つまりは、この「実験」は、
（上記で述べた様に）そもそも「完全に正しい手法」に則ってすらなかっただけでなく、
常に**資本主義体制側からの**（直接的・間接的な）**「妨害」**を受けていたと言う事である。

更にもう一つ「失敗」の原因をあげるとすると、
これらソ連や東欧諸国のほとんどは
「社会主義」を**始める前から非常に貧しかった**と言う事だ。
もしも、初めから富んでいたならば、資源や機器の再分配等も含め、
もっと楽に事は運んでいたかもしれない。

[
ちなみに、**社会主義を揶揄する**目的でよく引き合いに出される**寓話**に、
「雨が降っているのに道路に水を撒き続ける男」の話がある。
しかしながら、多くの人々が
「必要もない物・サービスを（詐欺的手法で）無理やり売り続けることによって
「生活の糧」を得ている」という意味においては、
現在の資本主義もそれと五十歩百歩である、
と私は思う。
]

つまり、２０年前の「社会主義諸国の崩壊」の原因は、
次の**３つの「準備不足」**があったせいだと思う：
（１）優秀かつ滅私奉公的なリーダーや官僚の養成；
（２）資本主義体制側からの妨害を受けない様な（友好的な）環境作り；

（３）充分な「運転資金」や「資源」や「機器」等の調達。

この様な状況で、
たった一度だけ「失敗」したからと言って、
それが「共産主義はうまくいかないことの証明」になど、
なり得る訳がないのである。

それどころか、それから更に２０年経った**今、**
資本主義における矛盾が次々と吹き出し、
今や資本主義自体が「崩壊の危機」に瀕している。
そして、私はこれは正（まさ）に
資本主義は「もはや」うまくいかない
事の体現だと思う。

何故なら、
資本主義の成功は**「経済成長」**に依存しており、
また、それは**地球の資源や市場が（実質的に）「無限」（無尽蔵）であることを**
「暗黙の必要条件」としているが、
今や人類は地球全体を埋め尽くしており、
その「暗黙の必要条件」は**もはや成り立たない**ことが明らかだからだ。

むしろ、**今、我々人類に必要なのは、**
（世界規模での）速やかな人口縮小および（経済も含めた）活動の縮小
である。

この様な、**大掛かりな「撤退戦」**を首尾よく進めるには、
全人類の協調的な努力・献身が不可欠である。
それは、（本質的に「自由」な）資本主義の下ではまず無理であり、
全世界の国々が（真の）社会主義（あるいは共産主義）になって
協調しあうことによって初めて可能となる。
[
これは、**昨今の環境変化への中国の非常に早い対応**を見れば、
いくらか納得できるだろう。
]

そして、**既に充分に富んでいる**西側諸国が**協調**して
「（真の）社会主義化」を遂げれば、
上記の「準備不足」のうちのすべてを解消することも夢ではない。

資本主義が原理的にすら崩壊しようとしている**今こそ、**
「機は熟した」と言えるのではなかろうか？

諸君の（くだらない「欲」や「煩悩」に左右されない）
「理性および勇気ある行動」を期待している。

「ネズミ講」と経済成長

江澤　潔　[初稿：2018/09/27; 改訂１：2018/10/18;
改題＆改定２：2020/10/17]

私は経済学の専門家ではないので詳細は知らないが、
どうも胡散臭く思うのは、今もなお
「経済成長」を支持／推奨している学者が多くいそうなことである。

詳しくは知らないが、**アダム＝スミス**が**「国富論」**を出した時は、
恐らく、資源や市場も含めた**「経済活動」の「場」**（あるいは**「舞台」**）は
「無限」だと仮定されていたのだと思う。
その仮定は、その当時はまだイギリスの海外進出も道半ばだったので、
「よい近似」として成り立っていたのであろうが、
今や地球はヒト（もっと正確に言うと「資本主義」を実践する人々）で
埋め尽くされているのであるから、そんな近似は成り立たない。

正確には、今はまだ、ミャンマーやアフリカ諸国等が「成長の余地」を残してはいるが、
じきに、世界人口も減少に転ずるという予想もある。
つまり、**好むと好まぬとに関わらず、**
これからは世界経済は「収縮」していく運命にあるのである。
[
どんなにテクノロジーが発達しても**「経済」の「土台」となる人口が減少**するし、
地球自身は拡大しないのであるから、もはや、これは避けられまい。
]
[
私は「人口減少」が始まるのが遅すぎると思っているが、、、
理想的には、世界人口は１０億人くらいにまで減らすべきである
、、、他の生物種達の「パイの取り分」を確保する為に。
]

「ネズミ講」というのを知っているだろうか？
大雑把に言うと、
参加者は金品を払って「会員」となるが、二人以上の「会員」を誘い入れる事が出来れば
彼らが払う金品を「配当」として受け取れるので儲けを得られる、
とうたった仕組みのことである。
これは、参加者が無限に増加し続ければ参加者全員儲けられるが、
実際には人口は有限であるので、**必ずどこかで「破綻」が生じる。**
[
そのため現在の日本では禁止されている。
]

実は、私は、

（経済成長を前提とした）資本主義というのは、
（人々がそれに気づかぬ様に精巧に調整された）「巨大なネズミ講」
の様なものではないか？
（そして、世の「支配者」達は、実は既にそれに気づいているが、
我々「平民」がそれに気づかぬように必死になって「洗脳」しているのではないか？）

と思うのである。

（ネズミ講同様、）
経済成長を続けるには市場などの「経済活動の場」が拡大し続けなければならないが、
「場」の拡大が止まるか否かは、全地球規模の問題である為、
その事が問題になるまでは人々は無視できた。
そして、
資本主義が全世界を覆いつくすようになった現在になって初めて、
この「原理的な経済活動の場の有限性」が
無視できない問題として立ちはだかっているのである。

従って、、
「経済成長」を前提とした経済学理論、社会体制、政治思想はもう古い、
と私は信じる。

むしろ、
ヒトはこれまで**地球環境を無節操に破壊**して来て、
地球が「悲鳴を上げ」始めて既に久しいのであるから、
これからは、人口および経済規模を縮小していかなくてはならないと思う。

その為にも、
「経済縮小」を前提とした経済学理論、社会体制、政治手法、および思想
を構築する必要がある。

そもそも**日本人**は**「経済成長」と相容れない「道徳観」**を持っている様に思う。
それは、**「慎ましく生活し、（将来や非常時の為に）お金を貯蓄する」**という道徳観である。

これが、日本国内での内需がなかなか拡大しない一因であり、
ひいては（アメリカ等との）貿易摩擦の要因ともなっていると思う。
[
もちろん程度の問題はあるだろうが、、、
]
資本主義には「（金を）稼いだら使う」といった生活スタイルの方が都合が良いと思うが、
日本ではそのような思想は道徳では教えていないだけでなく、むしろ、
「悪い例」とされる事の方が多いのではないだろうか？

このような日本人の「節約志向」は、
「経済成長」を目指す上では「足かせ」となるが、
「経済縮小」を目指す際には逆に「追い風」となりうる。

しかし、**それだけでは十分ではない。**
これまで、ほぼすべての社会システムは「経済成長」を前提に構築されて来たのであるから、
その**「流れを逆転させる」には、**
様々な経済学的、政治的、社会的な「大変革」を要するであろう。

その前に、
上記の「節約志向」や**「我々ヒトは自然の一部でしかない」**という「宗教の原点」
も含めた道徳や哲学など**「思想的な大改革」**が成熟すれば、
それらが「道しるべ」となってこの「大変革」の実行を後押しするであろう。

これは、言うのは易いが、実際に行うのはとてつもなく困難である。
しかし、**我々ヒトには「手をこまねく」という選択肢はない。**
何故なら、我々が今のまま進み続ければ、

地球がやがて「地獄」（あるいは「修羅」の方が正確か）と化すのは明らかだからだ。

世界の「真の天才達」が今すぐにもこの大問題に真剣に取り組むことを私は切に願っている。

[”ideal_society.rtf”「理想的な社会」も参照]

『欲望の資本主義２０１８＆２０１９』

江澤　潔　[初稿：2019/01/04; 改訂１：2019/01/12;
改定２：2020/10/17]

2019/01/04:
昨日、NHK BS1 で『欲望の資本主義２０１８』と『〃２０１９』を
昼食＆夕食を食べ（＆準備、後片付けし）ながら視聴していた。

カール・マルクス、フリードリヒ・シュリング、ヨーゼフ・シュンペンター、J.M.ケインズ、
フリードリヒ・ハイエク、ミルトン・フリードマン、ヘンリー・ジョージ、ジョン・ロック
等の伝説的経済学者／思想家達の考えの一旦に触れる事ができ、
また、
（トマス・セドラチェック、マルクス・ガブリエル、ユヴァル・ノア・ハラリ（「サピエンス全史」の著者）
も含めた）
最先端の学者達の議論を伺えたのは
大変新鮮で、また、勉強にもなった。

長〜い話をざっくりと一文で要約してしまうと、
「経済成長を前提とした資本主義はもはや立ち行かない」
という、**私がこれまでに培って来た考えを裏付ける**結果となった。

[
もう少し言うと、例えば２０１９の結論は、
「**経済学の巨人、ハイエク**が唱えたのは**「真の個人主義」**、つまり人間の真の自由、
であり、経済成長ではなかった。
（後世の人々が彼の説を都合の良い様に曲解したのである。）
また、今の資本主義のありようは、**経済学の父、アダム・スミス**が
思い描いたものともかけ離れている。
もしハイエクやアダム・スミスが今の世界を見たらきっと深く嘆いたことであろう。」
といったものだった。
]

ただ、私は、

（約１名を除き）これら**学者達が見落としている**、あるいは（故意に？）無視している、
大事な事実があると思う。
それは、
「地球は有限であり、人類はすでに地球上を覆い尽くしている」
という事だ。
ある試算によると、
現存の人間がすべて（欧米並みの）ある程度ましな生活を営むには、
地球が七、八個必要だそうだ。

最近、**「火星の地球化」**とか言う、
かつてのヨーロッパ人の「拡大主義」に更に輪をかけた、
非常にあきれた構想が持ち上がりつつあるが、
この状況の下では、仮にこれが成功したとしても、それは「焼け石に水」にしかならない。
それとも他の惑星も「地球化」するつもりなのだろうか？
、、、それは到底無理だと私は思うが、、、。
[
例えば、木星は、非常に大きな重力や、表面が地球とは全く違うことから無理だと思うし、
金星は、大気のCO_2濃度が非常に高くて「超温室状態」であり、
これが「地球化」できるぐらいだったら、
現在我々は「地球温暖化」の問題でこんなに苦労していない。
]

[
ちなみに、これを踏まえた私の観点では、
現在の「経済成長」は、人類の「発展」ではなくて「破滅への前進」にしか思えない。
]

従って、この「厳然たる事実」を踏まえれば、
我々がこれから取るべき道は自ずと（一意的に）決まって来る
と私は思う。

もう、我々は、**今すぐにでも「行動」を開始すべき**時に来ているのだ！！

追記（2019/01/04）：
昨日、ニュースで、「日本の「経済回復」は史上最長になった」とか言っていた。
、、、もう、誰もこんな「経済回復」なんか信じていないと言うのに、、、。
いったい何時まで、政府やその御用達機関はこの様な「大本営発表」を続けるのであろうか？
、、、呆れて物も言えんわ！！

追々記（2019/01/04）：
「新年の抱負２０１９」に従う為、
これを持って、詩やエッセイはしばらく「打ち止め」とする。

”身の丈”資本主義

江澤　潔　[初稿：2018/10/15; 改訂１：2020/10/17]

NHKスペシャル「マネー・ワールド、第３集」では、
現在資本主義が抱える**膨大な借金の問題**について説明された。

国の借金の問題はよく耳にしていたが、
個人や企業が抱える借金も異常に膨らんでいるというのは初めて知った。

どうやらこの面からも資本主義は崩壊の危機にあるらしい。

最近、マレーシアのマハティール首相は、
「”身の丈”資本主義」の政策を打ち出しているそうだ。
それは、**経済成長を無理やり目指すのをやめる**もので、
利子なしの貸付を行う金融機関（イスラム金融）が原動力となっているらしい。
[
なお、その金融機関は無理に借金を取り立てずに、
債務者の相談に親身に応じるそうだ。
]
なかなか面白い試みだと思う。

明らかに今の世の中は競争が過熱し過ぎなので、
世界の国々がマレーシアに見習って「無理しない」様になって欲しいものである。
さすれば、少しは希望の光も見えて来よう。

なお、この番組には某在京私立大のM教授が出演しておられた。
日本にもこの様にまっとうな考えを持った経済学者がおられる事を知り、
少しながらも将来に希望を感じることができた。

自転車操業

江澤　潔　[初稿：2018/10/18; 改訂１：2020/10/17]

「自転車操業」とは、
借金して何かを始めるが、
その借金（と利子）を返すために更に多額の借金を繰り返して、
どんどん借金が膨らんでいく様な経営のことを言う。

誰もが、（個人や企業のレベルでは、）
こんな方法は**いずれ「破綻」をきたす**し、いけない事であると、
（「常識」として）肌で感じている。

驚くことに、
先日のNHKスペシャルの「マネー・ワールド、第3集」では、
この、**「借金を返すために更に多額の借金を繰り返す」状態**は、
ほぼすべての資本主義国で現在起こっている事であるばかりか、
（「経済成長」を前提とした）資本主義の本質（あるいは宿命）である、
という説明があった。

しかしながら、我々の住む**地球が有限**である限り、
「経済成長」は必ずすぐに**「頭打ち」**となり、
その結果、「資本主義」と言う名前の「自転車」は「倒れる」、
つまり、世界経済は瓦解する。

すなわち、
（「経済成長」を前提とした）資本主義とは、
人類の「破滅」へとひた走る「自転車操業」なのである。

日本＆世界の将来

江澤　潔　[初稿：2018/12/21; 改訂１：2020/10/17]

2018/12/20 は日本＆世界の将来について興味深い番組が３つあった。

まず、BS-TBSの「情報１９３０」**「、、、この３０年は何だったのか？」**
では、原真人氏（朝日新聞、編集委員）と伊吹文明氏（元衆議院議長、自民党）が
１００兆円を超えた来年度の予算案についての背景やそれに関連する問題について
論じていた。
どうやら、日本では**政治家が大衆迎合的**になってしまい、
増税がしにくくバラ撒きが繰り返されて来たらしい。
両者とも一致していたのは、良い加減、すぐに**「痛みを伴う変革」**を行わないと、
近い将来に財政、そして日本国民の生活は瓦解する、という危機感であった。
[
ちなみに面白かいことに、
現在の財政赤字が膨らんだ状況は、**戦前日本の状況に酷似**していて、
その当時も政府やその宣伝機関は「国民が国債を買えば日本経済は安定し続ける」という、
（現在とある政府御用達の学者達が唱えるのと全く同じ様な）「デマ」を広めていたらしい。
]

次に、BSフジLIVE プライムニュース**「世界の大変革と日本のバージョンアップ」**では、
小林喜光氏（経済同友会幹事）と小宮山宏氏（三菱総合研究所理事長）が、
世界（とくに米中）に取り残された日本の将来について論じていた。
非常に手短に言うと、日本は、長い間**「ものづくり」**にこだわり続け過ぎた為に、
昨今の **IT 革命や AI の開発競争**、そして（GAFA等による）**ビッグデータの独占**、
に乗り遅れて、現在は**「２〜３周回遅れ」**になってしまったと言う。

この「遅れ」を取り戻すには、非常に大胆な手を打たなければならないが、
逆に、その「２〜３周回遅れ」の状況を「利用」して、
GDPと「（国民の）幸福度」が乖離してしまった現在の状況を是正し、
「一人も取り残されない道」を目指すのも一つの手かもしれない、
等と論じていた。

最後に、NHK Eテレ**「人間って何だ？超AI入門、第１２回、「働く」」**
では、「講師」の松尾豊氏と哲学者の小林康夫氏が
人間の仕事を補助するAI の発達を通じて、**「人間性」**について論じていた。
小林氏が論じるには、「人間は、太古から生存の為に闘争し（＝働き）続け、
そこに欲望や「所有」の概念が絡んで来たが、
もし、AI によって「働く」事が必要なくなったらどうなるか？
きっと、「存在の深さ、意味」「共感」と言うものが問われるであろう。」
松尾氏は、「生存の為の闘争こそが人間性で、
AI が「働く」事をになっても、
人間は闘争の為に「敵」「味方」を創って「部族ごっこ」を続けるだろう。」
というような事を論じられた。

私の感想であるが、
これら３つの番組の論者達は、比較的まともな考えを持っていて、
共感できることも多々あった。

しかしながら、
[
プライムニュースでの、GDPと「（国民の）幸福度」の乖離、および、
「一人も取り残されない道」という発言を除くと
]
どのお方も、**「（経済の）成長」「発展」「闘争」「（他国との）競争」**という、
（私が思うに）**「西洋的な考え」に毒され過ぎ**だと感じた。

縄文社会が数千年も持続したのは、
自然を敬い、自然環境と「共存」して来たからである。
ダイヤモンド博士が教えたように、**「所有」**の概念、そしてそれに依る**「不平等」**の出現、
そして**「闘争」「競争」**が生じたのは、
農耕・牧畜が始まってからのことである。
農耕・牧畜によって、
人間は、自然環境から「**独立」**できたかのような**「錯覚」**を持つ様になったが、
結局は地球環境に依存している事は、
昨今の地球温暖化、etc. による**自然災害の大規模化**が如実に物語っている。

AI が人間の仕事を肩代わりできるようになりつつある今こそ、
かつて自然と共存して来た（農耕・牧畜以前の）我らの先祖達の「知恵」を見倣って、
一日も早く、「成長」「発展」「闘争」「競争」の「呪縛」から解かれ、
「持続可能な社会システム」を築き上げるチャンスなのである！！

「勝者」の論理

江澤　潔　[初稿：2018/10/12; 改訂１：2018/11/28;
改定２：2020/10/16]

先日、NHKスペシャル「マネー・ワールド、第２集」に
某大手通信会社の有名なS社長が出演しておられた。
（爆笑問題も指摘していたが）彼の持論は**典型的な「『勝者』の論理」**だと感じた。

私のこれまでの（見聞きした事も含めた）経験から感じるのだが、
「勝者」達はやたらと自分の「成功体験」を他人に強要したがる。
[
その割に、（たとえ弟子でも）自分を脅かす存在が出てくると
全力で叩き潰そうとする。
]
また、現在の**体制が変わるのを極端に嫌がる。**
何故なら、自分が「敗者」になりたくないからだ
、、、現在においても、未来においても。

しかしながら、
特定の「成功体験」など、
その人の（生得の）能力や体質やその時の体調、
（出自も含めた）その時々の環境や時流、その他様々な不確定要素、
の結果「たまたま」うまくいった事が多く、
他の人々が異なる文脈で踏襲してもうまくいくとは限らないのだ。
[
むしろ、失敗する事の方が多いかも知れない。
]

[
唯一、**「成功」する確率を上げられる確実な方法**は、
「何度失敗しても諦めずに挑戦し続ける」ことであり、
実際、本物の勝者達の多くは何度失敗しても挑戦し続けた。
（例えば、漢の劉邦や、カーネルサンダース等は有名である。）
でも、これが出来るには、そもそも**タフな心身**がなければならない。
、、、そういう意味においては、彼（女）達は**「選ばれた人々」**と言えなくもない。
]

[
その他にも、**かなり普遍的な「コツ」**（あるいは**「教訓」**）は幾つか存在はする。
例えば：
コツコツと努力し続ける；
楽しんでやる；
適度な十分さで下調べをする；
仕事仲間や仕事相手に気分良くなってもらう；
「好きな事」ではなく「得意な事」を生業とする；
等々、、、。
しかしながら、これらも**決して「成功」の為に必要十分ではない**し、
それぞれの得手不得手には**著しい個人差**があるのだから、
状況を無視して常に無理強いするような事ではない。
]

（特に特定の王朝が編纂した）**歴史書**などでは、
（「神」の子孫である等）その**王朝の正当性**や、
始祖がいかに**「聖人君子」**であったかを
主張することがある種の定番となってはいるが、
そんなのはしばしばデタラメであるし、
むしろ、**躊躇（ためら）いなく姑息で卑怯で残虐な手を使えた**からこそ、
他者を征服できた可能性の方が高い。
[
歴史学の最近の発見では、
かつて「正史」で「悪人」あるいは「暗君」とされていた**「敗者」達**が
実は「善人」や「名君」と慕われていたらしいと**明らかになった**ケースが
多くある様だ。
]

また、（昔、NHK Eテレ、「モーガン＝フリーマンの XXXX」で紹介していたが、）
心理学のある実験では、
完全にランダムに「勝ち負け」が決まる**ゲーム**においても、
「勝者」達は「敗者」達を見下し、
（本当はただ偶然勝ったにも関わらず）**「如何にして自分が勝利を手にしたか」**
のプロセスを得意げに説明したという。
（まことに愚かしい限りである。）

それに、**仮に**、その「成功体験」が**本物だったとしても、**
それを全員が踏襲して、
全員が「勝者」になったら、地球が１００万個あっても足りないではないか？
したがって、実際には、「勝者」になるには、
結局また「新たな戦略／戦術」が必要になるだけである。
（でも実は「戦術／戦略」はどうでもよく、
偶然「勝者」が選ばれるだけであったりする。）

「勝者」達は、
実は自分達は数多（あまた）の「敗者」達に支えられているのだ、
ということをもっと自覚した方が良い。

ピラミッドの頂は、しっかりした「土台」（底）があって初めて、
高く安定してそびえることができるのである。

このことを忘れて「土台」の人々を思いやらずに慢心すると、やがて、
（**かつての数々の革命**の様に）その「土台」の人達に滅ぼされることとなる。

地球上の一握りの人間だけで富のほとんどを独占している現状では、
かつての様な「革命」が勃発する日は近い。

願わくば、彼（女）達「勝者」には、
自分らの「売り物」、例えば、商品やその製法、技術やその訓練法、等、
を「独占して高値で売る」なんていう「みみっちい事」はせずに、
公にオープンに公開して、社会でシェアして欲しい。
そうすれば、彼（女）達自身も含め、**誰もが皆幸せに暮らせる社会**が
実現することだろう。

「格差社会」と「自己責任」

江澤　潔　[初稿：2018/12/31; 改訂１：2020/10/17]

「探検バクモンスペシャル：平成遺産審議委員会」
では**「格差社会」**がトピックの一つであったが、
その中で**「自己責任論」**が出てきたのにはいささかびっくりした。
話を聞くと、
どうやら今（平成）の世では、
正社員になれた人々等**「勝ち組」**は、それを専ら自らの「努力」の結果と捉え、
正社員になれない人々やその他不幸な境遇にある人々（＝**「負け組」**）は
「努力が足りない」（＝「**自己責任**だ」）と考えている様である。

私は、こういう「自己責任論」を唱える人々には、
かつて扱った「勝者」達と同様、
[注：
「「勝者」の論理」（”winner'''s_logic.rtf）を参照
]
「現在の自分があるのは数々の「幸運」のおかげだ」
という「（厳然たる）事実」の無視と、
「自分は自分の力だけでやってきたのだ」
という**「傲り」**があると思う。

私が思うに、
現代の人間は社会の中でしか生きていけないのであるから、
本当に「自分一人の力だけ」でやって来れた人間など、
まず皆無であろう。
生まれ持った才能や産まれ育った環境をはじめ、
様々な手を差し伸べてくれた人々や
恩師達や教育環境等、
さらには、これまで重大な事故や災害等に遭遇しなかった事など、
人生には**「自分一人の力」だけではどうにもならない要素**が山ほどある。

「もしも、それら数々の「幸運」のうち、一つでも欠けていたら、
私も実は「負け組」と大差ない生活を強いられていたかも知れない」

と気付く事が出来れば、
不幸な境遇にある「負け組」を「自己責任だ」と盲目的に突き放す事なく、
彼（女）等に（同じ高さの目線で）寄り添ったり手を差し伸べてあげる
こともできる様になるであろう。

これは、**「正常性バイアス」**や**「因果応報」**とも関わる話でもある：
いかに落ち度のない生活をしていたところで、
災害や事故、その他様々な災難、はある日突然誰にでも降りかかってくるものである。
だから、
他人の災難を「他人事」として片付けずに**「明日は我が身」**と考える様に心がけるのは
大切である。

ちなみに、私の知り合いの多くも、

私の今の「不遇」を「自己責任だ」と思っている様である。
[
ちなみに、（様々な先天的障害を除けば）私は選んでそうしているのであって、
必ずしも現在の境遇を嘆いている訳でもないのだが、、、。
]

例えば、
私が（勝手に）「義兄弟姉妹」と思っている阪大時代の部活での同期の連中ですら、
私がナルコレプシー（睡眠障害の一種）と聞いて、
勝手に「（研究者に典型的な）不規則な生活をしていたからだ」と**決めつけた。**
しかし、私と同じ部屋で働いていた人々の証言を聞いて頂ければわかる様に、
実際には、
私は一般の社会人と同程度、いやそれ以上、に
規則的な生活および出勤パターンを示していた。
[
かつて母も私と同様の症状を示していたので、
恐らく私のナルコレプシーは先天的（遺伝的）なものであり、
生活態度に因るものではない。
]

また、私が（神経がむき出しになる程の）ひどい虫歯になった時、
当時の上司（国立大教授）は「毎日よく歯を磨きなさい」と仰った。
しかし、そんなこと言われるまでもなく、私はそれまでも毎日よく歯を磨いていた。
[
むしろ、歯医者には「磨きすぎだ（その結果、歯茎が著しく傷んでいる）」
と注意されたことがあるくらいである。
]
上司がこういう「間違ったアドバイス」をしたのも、
「（教授、准教授などの）安定な職に就けない様な奴らは、
「だらしない生活」をしているからだ」（＝「自己責任だ」）
という**「（偏見的な）固定観念」**があったからだと思われる。

この様に、私の様にきちんと規則正しい生活をし、
ストイックに人一倍（いや、十倍）の努力を続けている人間でさえ、
様々な要因の為に「不幸な境遇」に陥ってしまうのが
今の日本、いや人間社会、の現状である。
だから、
[
特に現在「自己責任論」を信じている方々には、
]
ただ、「現在の境遇」という「結果」のみを見て、
その人の生活態度や努力等、「これまでの経過」の部分まで「悪い（かった）」と
勝手に決めつけることのない様にお願いしたい。

重ね重ね申すが、
この世の中、「努力」だけではどうにもならない事は数多くあるのである。
[
むしろ、そちらの方が圧倒的に多い、とすら私は思う。
]

よくエジソンが言ったとされる「名言」に：

天才は１％のひらめきと９９％の努力から生まれる、

というのがある。これを**私は修正したい**：

天才は０.１％のひらめきと９.９％の努力、
そして９０%の（運など）外部要因から生まれる、

と。

スポーツ選手にせよ、芸術家にせよ、学者にせよ、何にせよ、
どんなに才能があってどんなに努力しても、
その才能を認め、また、努力を正しい方向に導いてくれる人々
がいなければ「開花」しないし、
特に、「ブレークする」には、
自分の力だけではどうにもならない外的要因がしばしば（いや、ほぼ常に）必要である。

また、
確かに今年の羽生結弦選手や大谷翔平選手や大坂なおみ選手ら
若手アスリート達の活躍は目を見張るべきものがあったが、
如何せん**「勝負の世界」では、**
一人の「勝者」の陰には何千、何万人もの「敗者」が存在する
のが厳然たる事実である。
[
北野たけし氏が今年最後の「情報７daysニュースキャスター」でコメントされた様に
]
こういった何万、何十万もの
「羽生結弦や大谷翔平や大坂なおみになれなかった若者達」を
救済できる様な社会を築くのは、
東京オリンピックが間近に迫ってきた今では特に、
単に「金メダル候補」達を養成する以上に、
大切なことだと私は思う。

もういい加減、
いつまでも「勝者」だけにスポットライトを当ててバカ騒ぎするのは止めて、
もっと「現実」を直視して、
「敗者」を救済するしくみ、
あるいはもっと進んで、
「敗者」を出さないしくみ、
をもっと真剣に議論してみてはどうだろうか？

それが出来てこそ、
やっと人間は「他の生物達を超えた存在」になれる様な気がする。

ピーターの法則

江澤　潔　[初稿：2018/10/16; 改訂１：2018/10/21;
改定２：2020/10/17]

「林修先生の初耳学」の「白熱教室」では、
林先生が見聞きした斬新（？）なテーマについて語ってくれる。
（時々ショボいのもあるが）割と「ナルホド」と思わせる題材が多いので
最近のお気に入りである。

先日は、**「ピーターの法則」**とやらの話があった。
ざっくり言うと、
仕事ができる「有能な」人が、
必ずしも管理や指導に関しても「有能」とは限らない
（、何故なら、それらに必要なスキルや能力は全く別物だから）。
従って、
（どこでも大抵、有能な社員を管理職に引き上げていくので）
「世界の管理職は無能だらけ」である。
という事だと思う。

これは非常に理にかなっているし、
私が他人を教えるのが苦手なのもこれで説明できるし、
私が PI（principal investigator）の公募を避けて来たのも「正解」だといえる。

しかしながら、
会社なら（仮に「窓際族」だとしても）「永久平社員」もあり得るかも知れないが、
（日本の）研究者の世界では、そもそも、
「管理職」（あるいは「社長」）クラスの PI にならなければ、
安定した職は得られない。
これでは**必然的に、**
多くの有能な研究者達が（離職、もしくは PI への「栄転」により）
どんどん「失われる」事となる。

できれば国主導で、もっとまともな研究システムを構築することが望まれる。

発達障害

江澤　潔　[初稿：2018/11/25; 改訂１：2018/11/27;
改定２：2020/10/17]

昨夜のNHK で「発達障害ってなんだろうスペシャル」というのをやっていた。

参加者（代表者？）の1人である小島慶子さんが、

発達障害は「個性」が「生活環境」に馴染まなくなったものである

という様な事を宣われた。
私も全く同感である。

社会が、個々人の多種多様な個性をもっと尊重し、
適切に対処できる様になれば、
恐らく多くの「**発達障害」は**「障害」ではなくなり、
むしろ**「個性」あるいは「特長」や「強み」として**
積極的に活かせる様になるであろう。

考えて見れば、
かの Einstein や Nash 等の「超天才」達は
ある種の精神障害や発達（？）障害を持っていたと言われる。
芸術家だったら、そう言う例は枚挙にいとまがないであろう。
（確実な例がすぐに思い浮かばないが、、、）

現在の日本社会が
あまりにも「普通」を強い過ぎて、
こう言った「才能」を潰したり見逃したりしているとしたら、
それは大変不幸な事である。
[
その個々人にとっても、社会全体にとっても、、、
]

番組では、
「発達障害の人でも働きやすい職場」も紹介していた。
[
後に「クローズアップ現代プラス」でもそういう企業を特集していた。
]
そこでは、
各自が仕事に集中できる様に働くスペースを個人ごとに仕切り、
電話の応対でパニックしない様に、電話をそもそも置くのをやめ、
疲れた時に手軽に休憩（仮眠）できる様に簡易ベッドのエリアを設け、
希望があれば外出しなくても食事できる様に
職場の近くにダイニングスペースも設けていた。

出演者の誰かが、「これって普通の人でも働きやすいかも、、、」
と評していたが、
実は、日本人の多くは知らないかも知れないが、
これは、洋書「The way we’re working isn’t working」
（邦訳：「忙しい社長の為の時間節約術？」）に出てくる、
（既に統計科学的に証明されている）
「（社員の心身の充実を保ったまま）生産性を最大限に引き出す職場環境」
に非常に近いのである！！
だから、普通の人でも働きやすいのは、ある意味当たり前なのである。

今、安倍政権が「多様な働き方の推進」を謳っているが、
もしもそれが有権者を引き付ける為の単なるポーズではなくて、
本気でそうしたいと考えているのであれば、

この様な職場環境をどんどん導入して行く事が必要不可欠だと思う。
特に、現在、人手不足で悩んでいる中小企業では、
この様な職場環境の導入が近い将来「死活問題」になってくるかも知れない。

ただ、一つだけ忠告しておくと、
こういった取り組みは「応急措置」であって、
「究極の目標」にすべきではないと思う。
これらの番組で扱っていたのは、
結局は「成功者」（あるいは「成功」を目指す人々や企業）である。
しかしながら、我々の社会が（資本主義社会に代表される）
「競争社会」である限り、
「成功者」（あるいは「勝者」）の陰にはいつでも
それよりもはるかに多い「失敗者」（あるいは「敗者」）が存在し、
そのうちの多くは「成功」する気力すら持ちあわせない。
[
（多分無理だと思うが）万が一、日本全体が「成功者」になったとしても、
その「成功」は他の（国家レベルでの）「敗者」の山の上に築かれたものである。
]

こういった、**「必然的な敗者達」を救済するしくみ**が無くしては、
皆が幸せになることはあり得ない。
しかしながら、地球が有限であり、
我々ヒトが既に地球上に溢れかえっている以上は、
「成長」を目指し続ける限りは「競争」、そしてその結果生じる「敗者」の山、
は避けられない。

結局、**皆が幸せになる為には、**
我々ヒトが**「成長志向」**や**「成功至上主義」を捨て去り**、
更には、**個々人の「個性」の違いを尊重**できるような**精神**を身につける事、
あるいはそうできる様な**社会システム**を構築する事、
こそが必要不可欠なのである。

[
私が上記の「クローズアップ現代プラス」を見終えた後に
なんとなく胸糞悪い気分になったのも、多分、
「なんだ、結局この番組は「成功」することを
押し付けようとしているだけなんだ、、、」
と感じたからで、
更に掘り下げるとそれは上記の様な考えから生じたのかも知れない。
]

（「「勝者」の論理」（”winner'”s_logic.rtf）、「理想的な社会」（ideal_society.rtf）も参照）

建前と「空気」、そして陰口

江澤　潔　[初稿：2018/10/06; 改訂１：2018/10/07;
改定２：2020/10/17]

これはどちらも私が昔から苦手だった事であるが、
とりわけ日本では、
人々は人前では**「本音」**と**「建前」**を使い分け、
周囲の**「空気を読んで」**行動する事が求められる。

[
実際には、
アメリカ等他の国でも「建前」はあるが、文化が違うと求められる建前も変わってくる。
例えば、日本では自分にせよ家族にせよひたすら謙遜するのが是とされるが、
アメリカでは自分や家族のポジティブな面を表現する事が求められるし、
彼らは（表面的だとしても）話し相手のポジティブな面を探し出すのも得意である。
]

しかしながら、**ぶっちゃけて言えば、「建前」は所詮、「嘘」あるいは**
（「本音」を隠しているという意味で）**「不正直」である。**

「嘘も方便」と言うことわざもあるにはあるが、
仮にそれが相手によかれと思ってついた嘘でも、
後で嘘がばれれば、それは**信頼関係の崩壊**につながりかねない。

更に良くないと思うのは、（日本では非常に多い様な気がするが、、、）
本人の前では**おべんちゃら**を並べ立てておきながら、
裏でその人の**陰口**をたたく事である。
それでは何の問題の解決にもならないし、
人間関係は悪化するばかりであろう。
[
逆に、その人を陥れる手段としては非常に有効ではあるが、
まず間違いなく相当の恨みを買うし、下手したら殺され兼ねない事は、
覚悟しておいた方が良いだろう。
]

従って、私は、
もしも相手が悪い、あるは間違っている、と思った際は、
それを正直に相手に伝える事こそが、
その人の為にも組織や社会の為にもなるのではないかと思う。

ただし、（特に相手が自分の上司だったりした時には、）
言葉を慎重に選ばないと、**「身の破滅」**を招き兼ねないので、
要注意である。

私は普段、ほとんど他人と話したりしないので、
そもそも「建前」を使う事も少ないのであるが、
それでも昔は空気を読んで、周りに適当に合わせてしまう事は少なからずあった。
[
ただし、「空気を読む」事自体が苦手だったので、ひょっとしたら
周囲が期待していない言動をしていたことも多々あったかも知れないが、、、。
]

しかしながら、
研究に関してだけは、昔から**正直を貫く**様に努めて来た。
何故なら、**我々科学者／研究者の仕事は「真実の追求」だ**と信じていたからである。
従って、研究結果が上司／恩師の思う様に行かなくても、
あるいは上司／恩師が間違っているのではと思っても、それを正直に相手に話し、
その結果、クビや島流しを繰り返して来た様な気がする。
[
「不正」（wrongdoings.rtf）でも述べる様に、それは現在日本の学界の嘆かわしい現実であるが、、、。
]

また、いつの頃からか、（多分、アメリカから帰国後、）
研究以外でも出来るだけ本音で語ろうと努める様になったが、
それが災いしてか、周りの人々に（昔以上に）嫌われ始めた様な気がする。
[
最近は人との「つながり」が鬱陶しくなって来たので、あまり気にはしていないのだが、、、。
]

とは言え、（ここに色々と書き留めた様に、）
私の本音は（非常〜〜〜に理に叶ってはいるものの）
現在日本では非常に「常識外れ」で「ぶっ飛んだ」ものである為、
とてもそのすべてを全開で明かす訳には行かないのであるが、、、。
[
明かしたら、精神病院か警察にでも連行される可能性すらある。
]
[
先日も、
元上司に「ガチの本音」と称して（絶交覚悟で）あれこれと申し立てたが、
実は、それでも（相手の立場や気持ちを考えて）正真正銘のガチの本音と較べたら
１／３〜１／５くらいにセーブせざるを得なかった。
]

次に、
「空気」とは、peer pressure（**「同調圧力」**）の事である。
どこの国や社会でもある程度は存在するとは思うが、
日本ではこれが格別に強い気がする。
皆、「空気」を「読もう」と、アンテナを張り巡らせてピリピリしている。
それ故に、私の様に「空気の読めない」人間が
（法的には何ら問題ないけど）「ぶっ飛んだ」行動を取ると、
皆、嫌悪感を抱いて無視したり陰口たたいたり仲間はずれにしたりしようとするのであろう。

同調圧力が日本で殊更に強いのは、
日本がそもそもは「和」の国であったからかも知れない。
「和」とは、いわゆる**仲間による合議**のことであり、
聖徳太子の１７条憲法では、「和」は、
法律や当時の最高水準の学問とされた仏教や儒教よりも優先された。
つまり、例え、法や学問の様な「指針」に反していても、
仲間同士の「合議」で定めた事は守らなければならない、
と言うのである。（井沢元彦著、逆説の日本史１古代黎明編）

この考えは、**西洋の「法治主義」や「罪刑法定主義」等とは本来相容れない**ものである。
恐らく、だから、（「安倍首相性善説」に立つならば、）

安倍首相が度々「日本は法治国家である」等とうそぶきながらも
（「空気を読んだ」結果であるところの）役人たちの「忖度」を素通りさせてしまったのであろう。
この様に、
日本は「法治国家」と自称こそしているが、
実際には、その**法治主義の度合いは西洋諸国とは比べものにならない程低い**ものであり、
それは恐らく、**日本が「和」の国**、つまり、
「空気を読む」事が「国民の至上命題」となっている国であるからであろう。

そう考えると、**この「空気」すなわち「同調圧力」こそが**、
学校での「いじめ」、企業の「不正」、
職場での「残業」、「過労死」、「パワハラ」、「セクハラ」
そして（東京医大入試で問題となった）根強い男女差別や、家事や看護の女性への押し付け、
また、（「観光客」ではなく、「仲間」「隣人」としての）外国人の受け入れがなかなか進まない事、
等、**現在日本が抱える諸問題の「根源」あるいは（少なくとも）「主な理由」の一つ**
である様に思える。

また、
それは関東大震災の時の朝鮮人狩りや、
第二次大戦中の「国家総動員」「非国民」等の主な原因でもあった筈である。

ここで警告しておきたいのだが、
この**日本人のこの「空気を読む」気質**は、
大衆が動員しやすいと言う意味で、**「支配者」に非常に利用されやすい**と言う事である。
たしかにそれは、
明治維新の殖産興業や戦後の高度経済成長期の様に、「目指すべき目標」がはっきりしていた時には、
（皆が一斉にその「目標」に向かえるので）大きな「駆動力」として働いた。
しかしながら、同時に、（第二次世界大戦時の様に）
戦争時に**なかなか反対を唱えられない状況を生み出す危険**もはらんでいるのである。
[
ちなみに、現在、「アベノミクス」の様な（原理的に持続不可能な）「経済成長政策」に
真っ向から反対する意見をなかなか言い出せない状況になっているのも、
この「同調圧力」のせいかも知れない。
]

しかるに、**（「これ」という定まった「方向」の存在しない）現在の世界状況では**、
恐らく暫くはどちらの方向に進むべきか模索が続くものと思われるから、
多種多様な考えが並立するのが望ましいし、
人間間の問題は、目に見えない「空気」ではなくて、**きちっと定まった「法」等で解決した方が**
（精神的な）エネルギーが節約できるだろう。

実際問題、
昔に比べると、
最近は日本も徐々に考えや価値観の多様性を認める様になって来ていると思う。
だから、
ここはいっその事、**「和」や「同調圧力」は捨て**て、
もっと**個々人の個性を尊重**し、
本来ならば敬うべき存在である**独創的で個性的な人々**を
「空気が読めない」と揶揄、嘲笑、中傷することなく
温かく受け入れられる様な世の中になって欲しい。
そうすれば、
（良い方向での）社会の「進化」がもっと促進される筈である。

「いじめ」をなくすには？

江澤　潔　[初稿：2018/12/01; 改訂１：2018/12/11;
改定２：2020/10/17]

最近 NHK 等で、
「いじめをなくそう」と啓発している番組をよく見かけるが、
多分、子供達だけをどうこうしても
「いじめ」がなくなる事はないだろう、、、
と私は思う。

何故なら、
「いじめ」の真の原因は、大人達にあるからである。

子供は大人（特に親）を見て育つ：
いくら学校で先生がキレイごとを教えたとしても、
家等の学校以外の場所で、親やその他の大人達が
他人の**カゲ口**を叩いたり、
良からぬ**ウワサ**をしたり、
他人に**やっかんだり**する姿を見せつけられたら、
子供達は「そうしてもいいんだ」と肌で感じ、
それを学校等で実践してしまう。

結局、
子供達の「いじめ」は、大人達の「不道徳」の「鏡像」に過ぎないのだ！

従って、私が思うに、
本気で「いじめ」をなくしたいのであれば、
まずは大人達の「道徳的再教育」を行うべきである：

１、自分達と（見た目、能力、考え方などが）**「違う」人達を**
そのまま受け入れ、理解しようと努める；
２、自分が**周りと違う意見**を持っていても、黙ってないで、
（良い事は「良い」、悪い事は「悪い」と）**はっきりと表明**する；
３、誰かに**文句や不平**があったら、コソコソとカゲ口を叩いてないで、
本人に直接それを話す（もちろん、感情的にならず、理性的に）；
４、上記２や３の後は、お互いに理解できる様に**話し合う。**

取り敢えずこの４つを、
日本中の大人達が実践すれば、きっとやがて「いじめ」は消えて無くなる
、、、子供の世界からも、大人の世界からも、、、、。

これからの日本は、それが可能となる社会を築くべきである。
、、、さもなくば、国際社会から取り残されてしまうであろう。

[
思うに、日本の**教育カリキュラム**には

「debate （討論）」が正式に組み込まれていないのも
問題なのかもしれない、、、。
そのために、
（他人に流されずに）自分自身の意見をどう形成するか？
や、
違う意見の持ち主とどう付き合うか？
がわからないのだ。
]

私が思うに、
恐らくその様な社会であるかどうかのバロメータとなるのが、
電車／バスで「席を譲る」行為の頻度である。

電車／バスで、お年寄りや妊婦さんや身体の不自由な人等に席を譲るのは、
大人なら誰でも「善行」だと知っているし、
最近はそもそもそれが公然と示されている。
それでも、**その様な行為を見るのはかなり稀である。**

これは何故であろうか？

私が思うに、
恐らく多くの大人達は、「できることなら譲りたいけれども、、、」
と思っていながら出来ずにいる。
そして、それは恐らく、
「席を譲る」行為が「目立った」行為（もっと言うならば**「周りから浮いた」行為**）
になってしまうからである。

我々日本人は、（特に集団内での）日常生活における経験から、
「目立つ」ことが「命取り」となることを肌で感じている；
それが、「善行」であるか「悪行」であるかはあまり問題では無い；
現代日本社会では、「出た杭」はしばしば酷（ひど）く叩かれるのである！！

そういう**心理的「ブレーキ」**が働くため、我々日本人は
「席を譲る」という「目立った」行為はできなくなってしまうのだ！！
[
そして、しばしば、屈託ない笑顔でお年寄りに席を譲ってやるのは
外国から来た人々だったりする；
彼らには、「目立つ」ことが「命取り」という観念はなく、
「善行」をするのはただ良い事なのだ！！
]
[
昔、「夕焼け」という題の詩を読んだことがある。
そこには、バス？電車？上での心優しい少女の席譲りに関わる葛藤が描かれていた。
この詩を読んで、少女、そして作者、にどことなく共感を覚えたのは
私だけではあるまい。
]

しかしながら、大人達のこういう心理が、
子供達に「引き継がれて」しまっている結果、
彼（女）達は**「いじめ」を「悪い事」と頭では十分すぎるほど解っていながらも、**
止めないで傍観してしまうのだ！！

[
読者は既にお分かりの事と思うが、
「いじめ」を「止める」という行為は、まぎれもなく「目立った」行為になる為、
その学童が次の「いじめ」のターゲットになるリスクが高い。
]

だから、日本社会が、
我々大人達がお年寄りや妊婦さんや身体の不自由な人たちに
屈託のない笑顔で席を譲れる様な社会になれば、
恐らく、学校での「いじめ」もやがて自然消滅することであろう。

[
建前と「空気」、そして陰口（white_lies&peer_pressure&gossip.rtf）
も参照
]

不妊の女性達

江澤　潔　[初稿：2018/10/27; 改訂１：2018/10/28]

今朝のNHK「おはよう日本」で、
「不妊の女性達の悩み」について特集していて、
私は胸を痛めた。

私は、この問題は、典型的な「日本社会自身の問題」だと思う。
もっと具体的に言うと、これは主に、日本における、
周囲と同じ事をやらなければいけない、
という「同調圧力」と、
（暗黙のうちに、あるいは「洗脳」によって）何か一つの「標準モデル」を設定して
それから外れた言動は許さない、
という「（体質、考え方、生き方等の）多様性に対する無理解＆非寛容」
の（非常によく似た）二つの要因により、
[
特に、この悩みには、「女性は子供をつくる「装置」に過ぎない」的な、
大昔から根強く残る「古い考え」が根底にある事はまず間違い無いと思う。
]

つまり、逆に言えば、日本が、
「同調圧力」がなく、
多様な体質、考え方、生き方等に理解があり寛容な
社会に完全になりさえすれば、
この問題が悩みになる事はほとんどなくなるであろう。

[
同様な事は「いじめ」等にも言える。
]

確かに、日本では、
（法で明記されている訳ではなくても）
「なんとなく」社会的に「ふわふわと」決められた
（あるいは戦前から残っている「もはや違法な筈の」）
慣習に大多数が従っている事はまだ多い。
[
残業やサービス残業がいまだに蔓延しているのも恐らくそのせいだ。
]

しかしながら、それらはそもそも「法で明記されていない」
のであるから、原理的には従わなくても良いし、
更には、仮に（結婚は別性間でしか認められない事等）法で定められていても、
それが（例えば「基本的人権の尊重」等の）憲法の大原則に抵触していると感じたら、
従わずに提訴することもできる。

従って、
大多数の人々が、法で明記されていない、あるいは「間違った法」で定められている、
事項によって、勝手に「（本来はありもしない）生き方の枠組み」を定めて
それに従って生きているところに、
その「枠組み」に従わない生き方をする人間が現れた際に、
前者が後者を非難する権利や道理はそもそもない筈なのである。
[
むしろ、そう言う場合は大抵なんらかの事情がある筈なのだから、
温かく見守る、あるいは応援してやるのが筋というものである。
]

私は日本の社会が１日も早く、
「同調圧力」がなく、多様な生き方に理解があり寛容な社会
になって欲しいと願っている。

とは言え、
今現在「不妊」に悩んでいる女性達は、
日本社会がそうなるまで待ってはいられないだろう。

そこで、今の社会においてどうしたら
悩みを解決／軽減できるかを考えてみる。

私に言えるのは、
（１）あまり自分だけで問題を背負いこむな、
（２）不妊治療をするなら用意周到にせよ、
（３）視点（考え方）を変えろ、
の３つである。

（１）まず、妊娠や不妊治療の成功／失敗は、多分に確率過程的なもの
（つまり、コインの裏表やサイコロの目を当てる様なもの）であり、
どんなに最善の手順に従ったとしても、普段どんなに善行を積んでいたとしても、

「絶対に成功する」ということはないのである。
だから、（ある程度、十分に準備をして来たのであるならば、）
失敗したからといって、自分を責める必要はない。
ただ、「（少なくとも今までは）不運だったのだ」と受け止めれば良いのだ。

私の見聞きした経験では、（災害なども含めて、「運」「不運」に関しては、）
欧米では（特にそれほど敬虔な信徒でない限りは）そういう受け止め方が普通だと思う。
日本では、輪廻転生等が今だに広く信じられているせいか、
何でも「（前世も含めた）過去の行い」のせいにする傾向がある。
世の中の多くの事象は、確率過程的であり、
「神様」は物事を「確定的に」定めるのではなく、
ただ、「サイコロを振って」決めているに過ぎないのだ、
と言うことをもっと念頭に置いた方がよいだろう。

また、自分の知人や有名人等の少ない体験談と自分のケースを比較したりしない方が良い。
特に、話題になったり、ニュースになったりするのは、
それがむしろ「奇跡的な幸運」だったからだと考えた方が良いであろう。
[
彼（女）らの言う「成功の秘訣」も、うまくいくこともあればいかないこともある。
]

それから、
もう一つ念頭に置いた方が良いのは、
「不妊」の原因の半分、あるいはそれ以上は、
夫の側に原因があることが最近明らかにされつつあることだ。
だから、どうしても子供を産みたいのであれば、
夫婦共に（ゲノム診断等も含めて）徹底した医学的検査を受けた方が良い。
要するに、（検査もせずに）自分1人で責めを負う必要は全くないのだ。

最後に、私見であるが、
自然死の確率の高かった昔は「産めよ、増やせよ」
という考えが支配的だったのも理解できるが、
今や、ヒトは地球に溢れかえっているのであるから、これ以上増やしても仕方ない。
[
更に本音を言うと、私は、もう人口は積極的に減らすべきで、
（中国の様に）三人以上子供を生む夫婦にはペナルティーを科すべきだ、とすら思っている。
]
だから、「不妊」であることに罪悪感を感じる必要など全くなく、
むしろ「地球の保全」に一役買っているのだ、と胸を張っても良いくらいだ、
と私は思う。

（２）不妊治療はただでも高額であるので、始める前に、
まず、自らが「原理的に妊娠不能」かどうかは調べておいた方が、
何度も治療してから発覚するよりも、無駄な出費は避けられるであろう。
特に、（１）でも言及した様に、「不妊」の原因の半分以上は夫に原因があるのだから、
夫婦そろって医学的検査、および生活指導を受けた方が良い。
[
夫の食生活、飲酒、喫煙、運動、禁欲その他が影響するという結果もあるようだ。
]

[

ついでながら、私自身は、実は、不自然な不妊治療には反対であるが、
（それが合法である限りは、）それを望む人々を無理に止める気は無い。
ただ、実践する医師や専門家達には、できるだけ「間違い」が起こらない様に、
慎重にやって欲しい。
]

あとは、どうしても子供が欲しいならば、できるだけ若いうちに挑戦した方が良い。
男女共に、年齢を重ねると、妊娠（あるいは不妊治療）の失敗する可能性が高まるのは
今や明らかである。
今まで、日本では、「女性就職率の M 字カーブ」というものがあり、
結婚・出産期に離職する女性が多く、その為にキャリアを捨てられない女性が
晩婚化して妊娠のチャンスを逃すケースが多く見られた。
これも結局は、日本では「家事＆育児は女性の仕事」という偏見が支配的であった
事が主原因であり、そういう偏見がない欧米各国などでは「M 字カーブ」はみられない。
早く、こういった「古い考え」が日本から消えて、
また、保育所やベビーシッター等がもっと普及＆整備されて、
女性が就職と育児を両立しやすい社会になることを切に願う。
今の政権が掲げている「多様な働き方が可能な社会」が
掛け声だけで終わらないように祈っている。

（３）ここでは、「妊娠できない」事実を、
如何に受け入れつつ「幸せ」に暮らせるか？を考える。

先ず、私は「視点を変える」ことを勧めたい。
要するに、「コップに水が入っていない」状態を、
（ネガティブに）「空（から）」と考えるのではなく、
（ポジティブに）「空気が入っている」状態、あるいは
「何でも好きな物を入れる余地がある」状態と考えるのである。

今の場合、それは、「子供ができない」事を逆手に取って、
（子育てをしない事によって生じる）「時間的、経済的余裕」を最大限に活かす事である。
例えば、趣味に本格的に取り組んだり、何か生きがいのある仕事を始めたり
する事ができる筈だ。

その際、（従来の固定観念に縛られた人々による）「周りの目」が気になるかも知れないが、
その対処法としては、
一つは、（心の中では）彼（女）達を「固定観念に縛られて可哀想に、、、」と憐れみつつ
（表では）適当に話を合わせる、もしくは付き合いを完全に断つ、
というやり方があるが、
もう一つは、もっと積極的に活動して、周りの人々を固定観念から解放してあげる、
というやり方もある。
[
ちなみに、私はもっぱら前者を採用して来た。
勿論、道徳的には後者の方が望ましいとは思ったが、
私にはそれだけのバイタリティがなかったのである。
]

それでも、どうしても子育てを諦められないのであれば、
孤児を「養子」として引き取ると言う手もある。
世の中には、様々な事情により、幼くして両親から引き離されなければならなかった

子供達が数多く存在する。
彼（女）らの養父母あるいは里親となるのは、立派な社会貢献であるし、
私としては下手な不妊治療をするよりも望ましいとすら考える。
「血の繋がった親子」でない事により、様々な問題に遭遇する事は予想されるが、
養子との間に愛情さえ育めればそれらもきっと克服できるであろう。
それに、直接の「血の繋がり」がなかったとしても、
人類全体で見ても他人の間のゲノムの違いはせいぜい 0.1% と言われているので、
そんなの大した違いでは無い。

[
私が思うに、世の人々は「血の繋がり」に拘り過ぎなのである。
私だったら、仮に私の両親が、実は直接の血の繋がりのない養父母だったとしても構わない。
一番大事なのは、血縁関係ではなく、
彼（女）等が「（私が）成人するまで育て上げてくれた」という事実であり、
私はその事に心より感謝している。
ましてや、私は自分のルーツ（系統）が何であるかにもあまり関心はない。
何故なら、その環境と努力によっては、
「どこの馬の骨」ともわからぬ者でも偉業をなし得るし、
逆に、（例えば）織田信長やチンギス＝カンの子孫であっても
凡庸な人生で終わってしまうことも充分あり得ることを知っているからだ。
実際、ほとんどの「偉業」は、純粋な「（生来の）才能」よりは、
環境と努力と偶然の要素によって生まれたものなのだから、
古来からやたらと問題視されて来た「血統」など、ほとんど何の意味も成さないのである。
]

更に一歩進んで、保育所や孤児院で働いたり、それらを経営したりする、
事もあり得る。
そこには単に自分自身の子供を育てる以上の「やりがい」や「使命感」が伴うであろう。
もちろん、それ故にずっと大変でもあろうから、選択する前に慎重に考える必要はある。

この様に、私としては、
あまり（固定観念に縛られて）「不妊」を悩み続けるよりも、
逆に、それを「神が与えたチャンス（あるいは「使命」）」と捉えて
何か別のことを始めるのが一番健全だと思う。

いずれにせよ、
どうしても「自分の血を分けた子供」が欲しいのであれば、
若いうち（できれば２０歳代まで）に妊娠する様に努力するのが
「自然の摂理」にあった方法である。
この事が医学的にはっきりと認識される様になったのはごく最近であり、
また、女性が妊娠、子育てしながら働ける環境が未だに充分整っていないのは、
現在「不妊」で悩んでいる女性達にとっては大変不幸な事であった。

でも、くれぐれも自身を責めすぎないのが大切である。

日本人は、自分の智力、能力をはるかに超えた問題に対しても
責任を感じてしまうフシがあるが、
それは「もう無理だったんだ」と潔く諦める事も肝心である。
世の中のほとんどの事象が確率過程である限り、
また、科学技術はまだ発達途上である限り、
「現在の我々ではどうしようもない」事は幾らでもあるのだ。

その上で、もしも余力があるならば、
自分たちの様な悩みをもつ女性達がこれ以上増えない様に、
社会のしくみを変える運動などにも積極的に参加して欲しい。

死について

江澤　潔　[初稿：2018/09/27; 改訂１：2018/10/19;
改定２：2020/10/17]

生まれてこのかた観察を続けて来た結果、
どうも**ヒト**というのは**死**をやたらと**忌み嫌う**ものだと感じた。
人々は赤ちゃんの誕生については祝福し、
また、こぞって長寿になる方法や薬や食事を探し求める一方で、
死について語るのは**タブー視**されている様に思える。
（これは日本人独特の**「言霊」信仰**に因るところも大きいのかも知れないが、、、。）
その結果、死後の処理について十分に議論もできぬまま、
本人達の望まぬ結末を迎えたりする。

かく言う私も、確かに、
家族や友人など大切な人、あるいは自分がひいきにしていた有名人が亡くなると、
心の底から悲しい気持ちがこみ上げては来る。
でもそれは、どちらかというと、
その人にもう二度と会うことのない「永遠の別れ」に対する淋しさと、
大事なものを失った「喪失感」が合わさったものであり、
「死」そのものに対する否定的な気持ちから来ているのではない。
何故なら、
「死」は遅かれ早かれ誰にでも訪れるのはわかりきった事だから、、、。
[
ただし、死によって、その人が続けてこられた活動が
中断せざるを得なくなった事に関しては同情する。
]

それでは、自分自身についてはどうか？
私もかつては死ぬのは怖かった。
それは多分、まだ見ぬ「死後の世界」に対して
言いようのない不安と恐れがあったからだろう。
でも、**いつの頃からか、「死ぬ」事自体は怖くはなくなった。**
自分が死後に地獄にいくか修羅にいくか餓鬼にいくかは知らないし、
（科学で示唆される様に）そもそも「死後の世界」などないのかも知れない。
でも、いつの頃からか、**「遅かれ早かれ死ぬのだから、恐れていても仕方ない」**
と思う様になった。

私が今（2018/10/19 時点）怖いのは、主に、
私の死によって起こると予想される二つのことである。
まず、私は今、**ある研究**に従事している。
そして、この研究は今後の科学（進化遺伝学）の正しい発展には不可欠で、
恐らく（その歩んで来た経歴故に）私でないと成し遂げられないだろうと自負している。
その為、私が今死んでしまったら、この研究が未完成に終わってしまい、
進化遺伝学および相同配列依存バイオインフォマティクスの
正しい発展の妨げになるであろう
事が、とてつもなく怖い。
もう一つは、今のご時世を鑑みると、（そして私自身の人生の軌跡も考慮すると、）
もし自殺でもしようものなら**「負け犬」のレッテル**を貼られてしまうのは確定的であり、
それを**私のプライドが許せるか**どうかという問題がある。
[
ただし、最近は「他人の目なんか気にするな」という思いがどんどん強くなって来ているので、
後者に関してはそのうち問題ではなくなるかも知れない。
]
この二つの障壁さえなくなれば、私は何時でも死を受け入れる用意ができるであろう。
[
それはいささか孔子の「朝に道を聞かば夕に死すことも可なり」にも似ているが、、、。
]

現存する**生物**には、多かれ少なかれ、
死を避ける性質あるいはそのためのメカニズムが備わっている。
それは、進化学的にはある意味当然のことであろう。
もしも死を避ける種Aと死を容易に受け入れる種Bが同時に存在し、
それ以外の形質はAとBですべて同等だったとしたら、
（資源が無尽蔵な状況下では）どちらがより生き残りやすいかは一目瞭然である。

しかしながら、もう一方で、私達は忘れてはならない。
死は、避けられないだけでなく、**不可欠なものなのだ**、と言うことを。

地球上に最初の生命が誕生してから約４０億年もの間、
我々生物は、世代から次世代へと遺伝情報を少しずつ変化させながら引き継いで来た。
各世代の**遺伝的多様性**を有した個体達は、いわば、
「進化の神様」による実験動物の様なものであった。
そして、その時々の環境に適した者達のみが、さらに次の世代へと遺伝情報を残す事が許された。
現在の「進歩的な」「人道的な」倫理観からすると、この様な**「生存競争」**は残酷だ、
ということになるのかも知れない。
しかしながら、地球は有限なのである。
もしも、この様にして産まれて来た多種多様な個体達がすべて死なずに生き続けたとしたら、
たちまちのうちにすべての場所および資源を「使い果たし」て、
地球上の生物は全滅してしまったであろう。
従って、**生物の「死」とは、（遺伝的に）もっと優れているかも知れない子孫達に**
活動の場および資源を確保する為に「神様」が用意した、
必要不可欠な現象なのである。
[
かつて、フーテンの寅さんが不治の病のマドンナ（誰か忘れた）に
「何故人は死ぬのかしら？」
と訊かれて、
「もし皆んな死なずに生き残っていたら、すぐに足の踏み場もなくなってしまうから」
の様に答えたのは、（滑稽ではあったが）慧眼と言えよう。

]

ここで改めて、ヒトに立ち返ってみると、
ヒトは死を避ける（あるいは「忌み嫌う」）性質が異常なまでに発達した種である様に思える。
確かに他の種もある程度は死を怖がり避けようとはするが、
彼らはもっと「自らの運命」に対し従順な様に思える。
しかるにヒトは、死を異様なまでに忌み嫌い、
それを避ける為に**医学等さまざまな手段**を「発展」させて来た。
恐らくは、この死を異様に忌み嫌う（恐らく遺伝的な）性質こそが、
ヒト（Homo sapiens）がこれまで幾多かの「絶滅の危機」を脱し、
（チンパンジーから枝分かれした）人類の中で唯一現在まで生き残った
主な原因だったのではないか？とさえ思えて来る。
[
色々な原因が取りざたされているのは心得ているが、、、。
]

しかしながら、**この、死を異様に忌み嫌う性質も手伝って、**
ヒトは近年どんどん増殖し、現在では地球上に溢れんばかりである。
[
地球および資源の有限性を鑑みれば、
これを「繁栄」と呼ぶのは、よっぽどおめでたい人達である。
]
誰もが（少なくとも心の中では）
既にヒトは地球にとって**「とてつもない重荷」**と化していて、
このままではいけないことは解っている（のではないかと私は思う）が、
誰も（その解決の為に）真剣に動こうとはしない。

ヒトが本当に（自ら主張する様に）「万物の霊長」であるならば、
もういい加減、この（死を忌み嫌う）生得的な性質を克服して、
もっと「死」についてオープンに語り合い、真剣に向き合うべきである。

具体的には、「生きる権利」と同様に**「死ぬ権利」**も与えるべきである。
いつまでも、長生きすることを漫然と夢見ていても仕方がないし、
延命や救命ばかりに医学を「発展」させるのも不毛である。
[
私は、**現在の少子高齢化の問題を起こした責任**の大きな部分は、
盲目的に「生かす」事のみを「使命」だと勘違いし続けて来た、
医療＆医学の「発展」にあると思う。
そして、残りの責任のほとんどは、
将来の（寿命の伸びの）見通しを見誤り、また、有権者たちの反発を恐れて、
これまで有効な政策を打ち立てて来なかった政治家達と官僚達にあると思う。
]
それよりも、
もう「役目を終えた」人々には（望むなら）**「卒業」する権利**を与え、
個々人には**「寿命の有限さ」を自覚して限られた日々を精一杯生き抜く**様にしてもらった方が、
地球資源的にも国家財産的にも、また、人的資源的にも、
ずっと良いのではなかろうか？

それには、例えば**「生」と「死」を同列に考える**様な、
新しい種類の宗教、哲学、または思想が必要かも知れない。

昨今の全世界規模の異常気象からも分かる通り、
既に地球は増え過ぎたヒトの活動に悲鳴をあげている。
早急に手を打たないと、きっと手遅れになるだろう。

神が与え給うた命

江澤　潔　[初稿：2018/09/28; 改訂１：2018/10/19;
改定２：2019/01/11; 改定3：2020/10/17]

実は、私にはどうしてもよく分からない。
どうして現代人達は「（自分等の）命」に対してこんなにも貪欲なのだろう
（他の生物の命に関してはこんなにも無関心なくせに）？
と言う事が。

多くの人々はやたらと命を延ばしたがり、また、
医師や救命隊員達は、「命を救う」ことが使命だと言って憚らない。
、、、とっとと死にたい人達にとってははた迷惑な話かも知れないのに、、、。
そして、医学や科学技術は、死ぬのを防ぐ手段また「失われた物」を回復する手段として、
様々な物を開発し発展させて来た。
（後でまた問題にするが）抗生物質や消毒薬やワクチン等はまだ可愛い方だし、
義手や義足、車椅子、その他、「人工臓器」等は、
まあ、（視力不足を補う）「眼鏡」の延長の様なものだと思えば許せなくもない。

しかし、臓器移植や再生医療や遺伝子治療くらいまでいくと、
「ちょっとやりすぎでは？」と思ったりするし、
遺伝子改変生物の生成やゲノム編集を用いた治療まで行くと、明らかに「引いて」しまう。
何故なら、これらは言わば「命を弄んでいる」ことに他ならないからだ。
こういう方法を開発や施術する人々は、
自らが「神」にでもなったかの様な気分でいるのかもしれないが、
（ゲノム情報およびその発現をはじめとする生命の成り立ちの）
原理をよく理解しないままにやっているのであれば、
それは（「科学」と言っても）所詮は「試行錯誤」を繰り返し積み上げているに過ぎず、
どんな重大な「副作用」が起こるか十分分からずにやっているのだから、
そんなのは「神」というよりは、むしろ、
単なる「錬金術師」あるいはもっと悪く言えば「悪魔」の所業に過ぎない、
と私は思う。

いつヒトは、このように「命を弄ぶ」（「能力」ではなくて）「権利」を与えられたというのだ？

自分等の命を延ばそうとするのはその人達の勝手だが、
それよりも（例え重篤な病気や障害があろうとも）「神が与え給うた命」を
しかと受け止め、全力で全うする努力をした方が良いのではないか？

その一方で、
ヒトは他の生物達に対してはものすごく残酷である。
台所でゴキブリをみつけるとためらいなく殺し、
腕に蚊が止まると即座に叩き潰す、
、、、というのはまだ序の口で、
（本当は自分等がその生息地を奪ったせいであるにも関わらず）
人里に野生動物が迷い込むと容赦無く射殺し、
トリインフルエンザが発生すると、その「拡大を抑え込む」為に、
平気で十万羽単位でニワトリを大量殺戮するし、
そもそも、自分たちの食料とする為に、何億もの家畜達を日常的に殺しているし、
更に言えば、（一見、何の罪も無い様に見える）穀物の「収穫」だって（その後の料理も含めれば）、
実は、数兆、数京もの「命」を奪い去ることに他ならない。
それに、実は、（上で述べた）消毒や抗生物質の投与等も、結局のところ、
（自らの命を守る為にではあるが）微生物たちの「大量殺戮」に過ぎない。

もしも、ある種の宗教の教義の通り、
ヒトが「造物主」が作り出したすべての生物達の「支配者」なのだとしたら、
これら「暴虐行為」もある程度は正当化されるのかも知れない。

しかしながら、
これまでの進化学の知見から明らかな様に、
ヒトは地球上の他のすべての生物とその祖先を共有し、従って、
ヒトは、**数億年前あるいは数十億年前には、**
イヌ、ネコ、ブタ、ウシ、ニワトリ、ウナギ、サンマ、
さらにはゴキブリ、蚊、ハエ、ダニ、エビ、カニ、
回虫、サナダムシ、ミジンコ、イネ、ムギ、大豆、ホウレンソウ、
キノコ、カビ、コウジ菌、酵母、アメーバ、ゾウリムシ、ユーグレナ（ミドリムシ）、
更には各種の細菌やその他の微生物達とも**「同胞」だったのである。**

これを踏まえると、
我々が日常、生活あるいは生存する為に何気なくやっている行為は、
本質的には、
突然降った大雨を避けようと家の軒先に雨宿りにやって来た従兄弟を射殺し、
身ごもった姉を殺してその胎内の赤子を喰らい、
嫌がる弟に無理やりビールをたらふく飲ませてその肝臓を取り出して味わい、
また、生命の仕組みを理解する為に、兄を殺して解剖したり、
妹を檻に閉じ込めて電気ショックを与えてその反応をつぶさに調べたりする、
のと何ら変わらないのである。

ここまで平気で（他の種族の）「殺戮」や「残虐行為」を日常的に行っておきながら、
「命は地球よりも重い」とか、よく真顔で言えたものである。

ヒトに本当に「平等権」「生存権」があるならば、
かつて我々の「同胞」であったこれら全ての生物に対してもそれを認めなければ
明らかに不完全ではなかろうか？

[
「人間はその知恵と科学技術によって地球を「征服」したのだから、
他の生物達は無視や虐待してもいいのだ」等と主張する人々もおられるかも知れない。
しかしながら、
その様な主張は、現在の「貧富の格差」の拡大やかつての「絶対王政」を是認するのと本質的には同等であ

る；
人間も含む地球上のすべての生物は元々は同じ祖先から枝分かれしたのだから、、、。
もしも、逆に、「人権の平等」を訴えたいのならば、同様に、全生物を平等に扱うべきであろう。
]

しかしながら、一方で、**それがあまりにも実現不可能である**ことは、
恐らく誰の目にも明らかである。
何故なら、もし本当にそうしたら、我々は
（食料も食べられなくなるので）あっという間に飢えてしまうか、あるいは、
（体内に侵入してきた病原体に対して無防備になるので）伝染病があっという間に蔓延するか、
して、すぐに全滅してしまうからである。

それでは、**どこに間違いがあったのか？**
それは恐らく、
「平等権」や「生存権」（あるいはその他あらゆる「人権」）が「天賦 」であると
思ったところにあるのであろう。
そもそもそんな「権利」は、自然界には存在しない。
（もっと正確に言えば、それぞれの生物に「生存権」等の「権利」は「ある」かも知れないが、
それを生涯保証する「法」の様な仕組みが自然界には存在しない。）
自然界では、各々の生物が、周りの「敵」や「獲物」達と日々闘争し、
またある時は他の生物と「同盟」を結んで、
その生存を確保しなければならないのである。
[
そして、子孫を残した個体達は、次世代の居場所や資源を確保する為に死んでいくし、
子孫を残す前に他の生物の「糧」となって死んでいく者達も多くいる。
]

つまり、恐らくは、
「平等権」や「生存権」等の「権利」は、「天賦 (heaven's gifts)」ではなくて、
あくまでも「人工的産物（artifacts）」であり、
従って、人間の間でしか通用しない概念なのだ。

故に、
そもそも**「生存権」等はもともと自然界には存在し得ない**（あるいは存在しても有効ではない）
のであるから、
「命は尊い」等というのも、恐らくはまやかしに過ぎない。
上記議論からも明らかだと思うし、「死について」でも多少述べたが、
本来、自然界では（一つの命は多くの他の命の犠牲の上に成り立っていると言う意味で）
「死」あってこその「命」なのであり、
「欠けがいのない (indispensable)」ことではなくて、むしろ
（個々という意味では）**「欠けてもいい（dispensable）」ことこそが、**
「命」の本質なのである。

また、これも「死について」で少し触れたが、
「（ほんまもんの）造物主」から見れば、
我々個人はあまたいる**「実験動物」の一つ**に過ぎないのであり、
「役目」を終えたら、次の世代に活動の場を与える為にさっさと「卒業」するのが
「造物主」の意にかなっているのである。

だから、臓器移植や再生医療や遺伝子治療等まで用いて悪あがきして
延命や不妊治療や病気／生涯の克服をしようとする

人々の「強欲さ」には、
たとえその裏にいかなる事情があったとしても、
それは「自然の摂理」に逆らっていると思うので、
私は疑問を禁じ得ない。

（少なくとも「生死観」に関しては、）
ヒトは、いい加減、目を覚まして他の生物達を見習うべきなのである。

一生の鼓動数

江澤　潔　[初稿：2018/10/20]

今朝のNHK総合「チコちゃんに叱られる」で、
カメが長生きなのは心臓の鼓動が遅いから、
と説明していた。

これを聞いて、私は大人気漫画／アニメ「聖闘士星矢」の術、
MISOPETHA-MENOS
を思い出した。
これは、女神アテナが天秤座の童虎（竜座の紫龍の師である黄金聖闘士）
にかけた「仮死の法」で、
心臓が１年で１０万回（普通の約１日分）しか動かなくするという。

ちなみに、「チコちゃん、、、」では、
動物（哺乳類）の一生の合計鼓動数は約８億回で、
それによってヒトの寿命を割り出すと、３０歳にも満たないと言う。
そして、実際に、縄文時代には平均寿命は３０歳未満だったらしい。

現在のヒトが如何に（医療やら何やらで）「無理やり」長生きさせられているか
を示す数字だと感じた。
そうならば、
（基本的には生命システムのガタである）癌やら認知症やらが
こんなに発症するのも無理はない、、、。

そんなに「無理やり」長生きしてまで、
人々は何をしたいんだろうか、、、？

少子高齢化社会

江澤　潔　[初稿：2018/10/09; 改訂１：2020/10/17]

この国で**「少子高齢化」の問題**が叫ばれるようになって久しい。
マスコミ等でよくされる議論（？）は以下の様なものである：
現在、日本では高齢者１人を国民（あるいは現役世代）３人で支える構造になっている。
このまま少子化と高齢化が進むと
？年後には高齢者1人を2人、？？年後には1人を1人で支えなければならなくなる。

私は、この問題だけなら、**年金制度および社会制度を劇的に改定してしまえば**
ほとんど問題にならなくなると思う。

[
ちなみに、私が以前述べた「理想的な社会」（ideal_society.rtf）が実現すれば、
そもそも「支える側」「支えられる側」が存在しないので、
この「問題」はそもそも問題ですらなくなる。
しかしながら、**ここでは、「理想的な社会」が実現しない場合の話をする。**
]

まず、やるべきなのは、現在**「分子」（支えられる側）**にいる人達のかなりの割合に
「分母」（支える側）にまわってもらう事であろう。

そもそも、**「年金制度」の基本理念**からすれば、それは、
生活の糧を（一時的または恒久的に）自ら得られなくなった人達を
得られる人達が助ける制度である。

日本人の平均寿命は年金制度が確立した１９６０年頃には６７歳程度だったが、
現在では８４歳くらいになっている。
逆に言えば、**それだけ「元気なお年寄り」が増えた**、と言う事である。
その様な**元気なお年寄りには、働いてもらい、「助ける」側になってもらえば良い**のである。

しかしながら、**人の健康状態には著しい個人差**があり、
１００歳近くでも元気な人達もいれば、まだ年金受給年齢に達してなくても元気のない人達もいる。
それ故、今までの様に、**一律に受給年齢を引き上げるのは無理がある**だろう。
従って、一番良いのは、
年金制度を抜本的に変えて、完全なる「保険」としてしまう事だと私は思う。
つまり、**「自らで（最低限の生活を営むのに十分な）生活の糧を得られなくなった」**
人々にだけ、そして各々必要な額だけ、支給するようにするのである。

その様に認定されるには、**２つの「テスト」**を通らなければならない：

１、働けるのに十分なだけの**健康状態**にない。
２、働かなくても食っていけるだけの**財産／資産**がない。

十分に健康な人々には働いてもらう。
また、２に通らなかった人々には、自らの財産／資産で暮らしてもらう。
また、働けるが、フルタイムは無理で資産／財産も十分にない、と言う場合は、
足りない分だけ年金を支給する。
こうすれば、
現在「支えられる側」にいる人々のかなり多くが「支える側」にまわることになるだろう。

この様な「年金制度の抜本的改定」を、
今の政治家たちが持ち出すことは恐らく出来ないだろう。
何故なら、彼らは（今や票の大きな部分を占めている）高齢者達を怒らせたくはないからだ。
しかしながら、このくらい大胆な事もできない政治家達に、
日本の将来を守る事などできるとは到底思えない。

安倍政権でも、
多少似てはいるがこれよりもずっとマイルドな改定を打ち出そうとしてはいるが、
私はまだ生ぬるい（したがって、ほとんど「焼け石に水」である）と思う。

ここはまず、
日本が現在陥っている状況を予期できずに、あるいは予期していたけど
有権者の顔色ばかり伺って有効な施策を打てずに、年金制度に関する状況を悪化させ続けた
張本人達（既にいなければその子息もしくは部下達）に、責任を取って切腹でもしてもらって、
これまで騙され続けて来た国民達の怒りをなだめてから、
この抜本的改定を**断行する**べきである。

さて、
年金制度のこの抜本的な改定の際に、**障害**となるのは、現在の日本の社会制度、
もっと具体的には、**雇用制度**である。
つまり、現在、ほとんどの職場で、**「定年」が存在し、また、高齢者は雇ってくれない。**
この状況を変えなくては、年金制度の抜本的な改定はあり得ない。

「定年」が存在するのには、恐らく**理由**がある。
一つには、若い働き手を入れて**「組織の新陳代謝」**を測る狙いがあるのだろう。
また、歳をとると、どうしても、体力や視力や反応の速さ等、衰える能力はある。
しかしながら、もう一方で、
歳を重ねることによって、経験値や社交性や人脈等、**どんどん積み重なっていくものもある**のだから、
そういった部分は**積極的に利用**した方が、その組織にとっても良いかも知れない。
だから、一つの手は、
ある年齢に達したら、それまでのバリバリ働くコースからは外れてもらい、
例えば、**パートタイムの「相談役」**として改めて働いてもらう、ことであろう。

しかしながら、初めから、職場自体が
短時間勤務や週三日勤務、あるいは在宅勤務など、
「多様な働き方」を受け入れる体制ができていれば、
年齢に応じた働き方のシフトもスムーズにできる様になり、
問題も減らせるだろうし、**高齢者の「新規採用」**もし易くなるだろう。
そうすれば、
ある年齢に達したら、職場を変えて**「第二の（仕事）人生」**を生きる選択肢も可能となろう。

従って、**日本でも**、これまでの「バリバリ残業する正社員」だけでなく、
もっと「多様な働き方」をする人々を受け入れる様な職場が増えれば、
上記の問題自体はほぼ解決する筈である。
それに、その様な社会になれば、**女性の職場進出**も自然と進む事となる。

第４次安倍内閣でも、
「職場改革」「働き方改革」に関して、これと似た様な目標を掲げているが、
掛け声だけに終わらずにどんどん推進してくれることを祈るばかりである。

ということで、前述の「支える側」「支えられる側」の問題に関しては、

（その気にさえなれば）「比較的簡単に」解決できると思うが、
今のままではどんどん高齢者の占める割合が高くなることは事実であり、
それにより、
（「介護離職」等の）**介護関連の問題**、（国家予算に占める）**介護医療費増大の問題**
などは以前として残り続ける。

少し「冷血」だと思われるかも知れないが、
私は、
この最も手っ取り早い解決法は、
行き過ぎた医療（特に「延命治療」）を止めて、
もう**回復の見込みのない方々には「卒業」してもらう**ことだと思う。

「死について」（about_death.rtf）でも述べた様に、
「死」は避けられないばかりでなく、生物の進化上「必須」なのであるから、
少なくとも**自然な「死」は受け入れた方が良い。**
特に、
我々各々が１日生き延びる為に（微生物も含め）何億何兆もの「命」を犠牲にしているのだ、
と言うことを考えれば、
いたずらに長生きしよう等と言う気持ちは生じない筈である。
癌やその他の病気など、「自然な死」くらいは受け入れた方が良いと思う。

また、**「介護離職」**などの結果、介護する側される側が**「共倒れ」**になる様なケースでは、
本当に介護される側は、それを望んでいるのだろうか？
恐らく違うと私は思う。ひょっとしたら、むしろ、介護される側は
介護する側がそんなに苦しんでるのに心を痛めているのではないか？
どちらかと言うと
「共倒れ」の主な原因は、
介護する側の（敢えてきつい言い方をすると、「孝行した」気分に浸りたいという）**「自己満足」**、
もしくは一般社会的な**「同調圧力」**（放っておいたら変な噂が立てられる等）、
ではないかと疑っている。
しかしながら、
今は、ただでさえも、一人一人が生きていくのに精一杯な時代であるのだから、
なかなか身内を介護するのも難しい。
だから、もう明らかに回復の見込みがない場合には、**「卒業」できる選択肢**も
法的に与えておいても良いのではないか？

いずれにせよ、これには
「死」をタブー視する事なく、「必然」として受け入れる様な思想
が広まることが不可欠である。

最後に、**出生率の低下に関して**であるが、
実は、**私はこれが本当に問題だとは思っていない。**
何故なら、私は**日本の人口は既に「多過ぎ」**であり、
これから暫くは減った方が望ましいと思うからである。
[
「パイの取り分」（our_share_of_the_pie.rtf）で述べた様に、
私は日本人口は２千万人くらいにまで減るのが望ましいと思っている。
]

しかしながら、
私ですら、**若者の割合が多い社会の方が健全**だとは思うし、

出生率の低下を問題視している人々は多い（というか、ほとんどの人がそうである）ので、
ここでは、どうしたらこれを**改善**できるかを考えてみよう。

出生率の低下の主な原因は、少なくとも３つはあると思う：
（１）日本（あるいは人類）の**将来に希望が持てない。**
（２）子供を産み育てる（金銭的、時間的、体力的）**余裕がない。**
（３）**婚姻率の低下**および**晩婚化。**

（１）は読んで字の如くである。
今は日本のみならず**世界中で色々な問題が噴出**していて、
この先どうなるか分からない。
「この様な状況下で、子供を産んで次の時代を担わせるのは、可哀想だし、
（我々は）無責任ではないか？」
と考える（優しい）人々が増えて来たのであろう。
[
昔だったら、「だからこそ、（家／血筋を断絶させない為に）子供をたくさんつくるのだ」
と考えたのかも知れないが、人権の考えが広まった現在ではそうはならない。
]

これを解決するには、一刻も早く**「将来に希望が持てる」安定した社会を実現させる**事だ。
[
しかしながら、「持続可能な経済成長」は原理的に無理である事は、
念頭に置いておいた方が良いだろう。
]
世界の政治家やリーダー達に頑張ってもらうしかない。
あるいは、若者達で「新たな動き」を始めて広めてもいい。

（２）これは、実は、複合的な要因からなる。

まず、**現在子供1人を産み育てるのにかかる費用（／生活費全般）**は、
例えば高度経済成長期よりも**ずっと高い**筈である。
最近では大学に行くのが当たり前になっただけでなく、
あろうことか**国立大学の授業料**が昔よりずっと高くなり、ほとんど**私学並み**である。
また、塾やスポーツ教室等の**習い事**に行かせる数も増えているのかも知れない。
だから、これらすべて含めた教育費は昔とは較べものにならないくらい高い。
それに加えて、
親のもらう**賃金**は例えばバブル期と較べるとかなり**減っている**為、
そもそも複数の子供を産み育てるのは金銭的に難しい。

今度、政府が**「高等教育の無償化」**を図るらしい。
いったいどこにそんな財源があるのか甚だ疑問ではあるが、それが実現すれば、
この問題は多少は軽減されるかも知れない。

次に、**親の介護の問題**がある。
昔に較べて長生きする様になっているだけ、介護の時間も長くなっている。
こちらに金銭や時間や体力が奪われてしまったら、
とても、子供を（特に複数）産み育てる余裕など残らない。

ここでも、上記で述べた様に、
もう回復の見込みのない方々に**「卒業」する自由**があれば、
もっと子育てに専念出来る環境が整うかも知れない。

もう一つは**「女性の社会進出」**と関係がある。
要は、「女性が働く様になったから、育児にばかり時間をかけていられない」
と言う問題であるが、
保育所やベビーシッター、あるいは（まだ元気な）親に子供の面倒を見てもらう、
等をもっと充実させる事、および、
男女両方とも**育児休暇**を取りやすくしたりする等「多様な働き方」に関連する改革の
進展によって補うことが出来よう。

（３）**婚姻率**が下がれば産まれる子供も減るのは理解できるし、
女性が（自然に）子供を産める年齢には上限があるので、
婚姻が**遅くなれば**なる程、子供を産めるチャンスも減ってくる。

これも、主に「女性の社会進出」と共に議論されることが多いと思うが、
日本以上に女性の社会進出が進んでいる欧米ではそれ程問題になっていない様である。
男子が「草食化」した事もある程度影響あるのかも知れないが、
女性の意志／意向を尊重する事自体はそんなに悪くないかも知れない。
むしろ、**まだ、「子育てしながら働く女性に優しい世の中」になり切っていない**事の方が、
問題ではないかと思う。
だから、（２）の最後に述べた様に、
子育てを支援する施設の充実、
および**「多様な働き方」を選べる様な制度の充実や社会的雰囲気の醸成**
が進めば、
もっと婚姻率も上がり、婚姻年齢も下がる可能性が高い。

こちらについても、現在の政権がなんらかの施策をすると公言しているので、
それが掛け声だけで終わらず、「変革」がどんどん進むことを期待しよう。

この様に、出生率の低下は、色々な要因が絡まった結果生じている。

とある政治家やお偉いさん達を含め高齢者の多くは、
まだ**「古き良き時代」**の事が忘れられないらしく、
（あるいは自分達の「支え手」が減ることを心配してか、）
しばしば若者達に対し無神経に「もっと子供を産め」等と仰る。

しかしながら、そう言う前に、
社会自体を「若者が多くの子供を産める社会」に変える方が先決である。

上記でもわかる様に、
実は、彼達（高齢者達）自身が、
若者達の「重荷」となり、または、（いつまでも職場に居座って）頭を抑えつけ、
あるいは（古い考えに縛られているせいで）社会の変革を妨げる等して、
少子化の原因になっている可能性の方が高い。

彼らは、若者達に文句を言う前に、
（社会情勢の変化をわきまえて、）まず、自分自身を改めるべきなのである。

老後の不安

江澤　潔　[初稿：2018/10/19; 改訂１：2018/10/20;
改定２：2020/10/17]

私が感じるに、
日本では今、老若男女誰もが、
「老後の生活」について不安を抱えている様に思う。

しかし、実は、私にはそれが何故だか分からない。
何故なら、私は、
健康上もしくは経済上、「これ以上は保たない」
と思ったら、（自ら）命を断てば済む事だ、
と思っているからである。

「死ぬことによって迷惑をかけたくない」
等と言い訳をする人もいるかも知れない。
しかしながら、**どうせ我々ヒトは遅かれ早かれ死ぬのであって、**
その時には「一回限り」迷惑がかかるのであるから、
それは死ぬのを「後回し」にする理由にはならない。
むしろ、**迷惑をできるだけかけたくなければ、**
「死に方」を選ぶべきなのである。
[
例えば、
電車に飛び込んだり、突如消息を絶ったり、
自分の住むアパートやマンションに火をかけたりしたら、
大勢の他人に迷惑がかかるであろうから、
それはやめた方が良い。
]

また、「迷惑」云々を考えるのであれば、
何故、
仕事やボランティア活動等もせずに
国から生活費や医療費等を払ってもらい、
また、家族に離職までさせて介護してもらっている状態は、
「（社会あるいは家族への）迷惑」
だとは思わないのだ？
[
「今まで奉仕して来たから、良いのだ」と言うのは、なしである。
働いている間も（ゴミ処理や治安維持も含め）政府のサービスは受けているのであるから、
恐らく、その「奉仕」の「貯蓄」は、退職後の数年程で尽きている。
何より、近年の**深刻な財政赤字**がそれを如実に語っている。
]

私が思うに、
この「国民的大問題」のそもそもの元凶は、
老後に生じる色々な問題を無視しておいて、
「長生きは良い事だ」と（ヒト一般がほぼ盲目的に）思っているところに
あるのではないか？

ヒトを含めすべての生物には、**（自然が定めた）「死に時」**と言うものがあるのだと、私は思う。

それは、人間社会（あるいは生態系）への「貢献」がもう望めなくなり、
それから先は「お荷物」になるしかない、
と自らが（心もしくは身体で）「悟った」時期である。
[
もう一つは、
（大半の読者も同意すると思うが、）
自分の命を投げ打ってでも「何か」を守らねばならない時である。
]

個々人（あるいは個々体）が、その「死に時」の前後に「時宜的に」死ぬことにより、
人間社会（あるいは生態系）の「新陳代謝」が正常になされ、
社会（生態系）が健康に保たれるのである。

いわば、
「（時宜的な）'死」は、我々個々人（あるいは個々体）に等しく与えられた、
社会（もっと言えば地球）への、**「最後の大切な奉仕」のチャンス**なのである。
[
そして、
ヒト（とそのペット）以外のすべての生物は、そのチャンスをきちんと活かしている。
]

それを、
「命を救う」事だけが「使命」だと勘違いした医療＆医学の「発展」のせいで、
この「最後の大切な奉仕」のチャンスが失われて来た結果、
ヒトの平均寿命は近年どんどん上昇し、
今の政府に至っては、「人生百年時代」を見越した社会制度の設計に乗り出すなど、
明らかに「不自然な」事態となっている。

しかしながら、
我々個々人が、**「死」の**不可避性のみならず、その**必須性**をも、もっと自覚して、
（肉体的もしくは経済的に）**「適当なところ」で死ぬ事を受け入れ**（あるいは励行す）**れば**、
（介護や認知症等も含めた）「老後の不安」のほとんどだけでなく、
（ガン等の高額な治療費を含めた）「日常の不安」の多くも、
特別な方策を施すまでもなく、
即座に「解決」する筈である。
[
何故なら、
それらはもはや「不安」ではなくなるのだから、、、。
]

そして、その様に**「必然的な死」に正面から向き合う**ことにより、

「人生は限られてるのだから、その間は（漫然とではなく）精一杯生きよう。
（泣いても笑ってもあと〇〇年だ！！）」

という前向きな気持ちが生まれる筈である。

ただ、**最後に一つ**だけ断っておくと、

この**「死ぬ自由は」あくまでも個々人の自由**であって、
他人が直接あるいは（（日本人得意の）「同調圧力」等によって）間接的に
強要するべき物ではない、と言う事である。
もしも、他人に強要されるようになると、
例えば、（富裕者層も含む）「特権階級」が「民衆」の人権を不当に制限するのに
利用されたりしかねない。

（致命的な傷や病気などの本当にやむを得ない場合を除けば、）
あくまでも、
「生きる」のも「死ぬ」のも、それを決めるのは、
外部からの「圧力」から完全に独立した、個人の「自由意志」によるべきである。

おまけにもう一つ、
このごろ**「孤独死」**がよく問題にされるが、
基本的に、ヒトは死ぬときは1人で棺桶に入るのであるから、
（仮に心中や集団自決をしたところで）
そもそも「死」とは本質的に「孤独」なものである。

それに、
元気で一人暮らししていた老人が**「ピンピンコロリ」**で孤独死するのと、
病気がちで何年も**「寝たきり」**で苦しんだままの老人が、
家族に看取られながら亡くなるのと、
どちらが本当に「幸せ」なのか？
と訊いたら、多分、（個々人の考え方の違いによって）どちらの答えもあるであろう。
だから、
「孤独死」＝「不幸」と盲目的に決めつけるのは如何なものかと思う。
[
ただし、孤独死した方に身内や親類がないと、
「誰がひきとるか？」と言う問題は生じるが、、、。
婚姻率が著しく低下している現状からすると、
恐らくこれからも「孤独死」は間違いなく増え続けるから、
さっさと法律か何かで**しっかりとした（そして実現可能な）ルール**
を定めておいた方が良いであろう。
]

私は思う。
人生が「幸せ」だったかどうかは、
その人が「如何に死んだか？」ではなくて「如何に生きて来たか？」
で決まるのではないかと。

実際、
「死に様」だけを見ると悲惨でも、
生前に偉大な業績を上げて来た人々は数多い。
今でも昔でも、どうせ、「望み通りの死に様」が出来た人など稀なのである。
だから、
せめて「生き様」くらいは、
少しでも自らの「望み」に近づけられる様に努め、
何としてもやらねばならぬ事は出来るだけ早めに片付けて、
「いつでも死ねる」（心の）準備をしておきたいものである。

パイの取り分

江澤　潔　[初稿：2018/09/27; 改訂１：2018/10/10;
改定２：2020/10/17]

地球上の生物達は、それぞれ、
地球の場所＆資源という「有限なパイ」の中の一部を
自分らの**「取り分」**として利用しながら
生命活動を営んでいる。

ヒトも出現してから長い間は、自然に対し畏敬の念を払いながら、
ささやかな自らの「取り分」を使いながらつつましやかに生活してきた。

しかし、恐らく**農耕＆牧畜が始まって**から、
ヒトの人口および活動は指数的に増加し、
それを可能にする為に
他の生物達から（分不相応に）大きな「取り分」を奪い取って来た。

いや、そればかりか、実際には、
アマゾンやシベリアを代表とした森林破壊や、サハラやゴビを代表とする砂漠化、
また、
工場排水排ガスによる水質大気汚染、更にはCO2 排出による地球温暖化等々、
数々の「環境破壊」により、
地球という、本来はすべての生物で共有すべき「有限なパイ」自体を
「削り取って」いる始末である。

その結果、ヒトはこれまでに数千、数万もの生物を絶滅させ、
今でも彼らの生息地をどんどん奪い去り、
その挙句、
やむにやまれず里山に迷い込んだ哀れな野生動物達を無慈悲に殺害したりして来た。
更には、「集団コントロール」や「疫病封じ込め」と称して、
「大量殺戮」を伴いながら、
自分勝手に家畜や人里近くに棲む野生動物達の数を制限して来た。

しかしながら、
元を正せば、所詮はヒトもかつては他の生物達と「同胞」だったのであるから、
もういい加減、この様な「横暴」は止めて、
他の生物達に「取り分」を返してやったらどうか？

その為には、当然、**ヒトはもっと慎ましく生きていかなくてはならない。**
もう原理的に無理な「経済成長」なんかにこだわるのはさっさと止めて、
（他の生物達ではなくて）**ヒト自身の人口をコントロール**し、
地球環境に負担をかけないでも生きられる手法を開発しなければならない。
[
理想を言えば、世界人口は１０億人くらいにまで減らすべきだ。
もし現在の国別人口の割合を保つとすると、
日本人への「割り当て」は２千万人くらいである。
]

それと同時に、**かつて我々の祖先がそうであった様**に、
もっと自然に畏敬の念を持って接し、その「飽くなき欲望」を捨て去って、
他の生物達および地球環境そのものと平和に「共存」できるような「心のあり様」
を取り戻さなければならない。

それができて初めて、
我々ヒトは、「母なる地球」の」癌」ではなくて
「宇宙船地球号」の立派な「一員」と見なされるのである。

補足：
かつて（約３０〜２０億年前、）
藍藻類が地球を席巻し、
気球環境および生態系をガラッと変えてしまった時期があった。
[
それまで嫌気性生物主体だったのが、好気性生物主体に変わった。
]
しなしながら、忘れてはならないのは、
藍藻類は生産者（独立栄養生物）だと言う事だ。
だから自給自足の生活ができ、地球を席巻しても問題なかった。
一方、**我々ヒトは消費者（従属栄養植物）**なのだから、
他の生物達に依存しなければ生き残れない。
従って、**我々が完全に地球を席巻すると言うことは、**
我々自身の滅亡を意味するのである。

癌

江澤　潔　[初稿：2018/09/27; 改訂１：2018/12/13;
改定２：2020/10/17]

ヒトは**癌**をやたらと恐れる。

でも、私的には、それは
（放射線やある種の薬物やウィルスによって誘発された場合を除き）
どちらかというと、
主に体内に備わった細胞増殖プログラムの異常および免疫力の衰えによるもので
一種の「老衰」の様なものだと認識している。
いわば、癌は「神様」が
「あなたはこれまでよく頑張ったから、もういいよ」
と云う意味で授けた**「人生の卒業証書」**の様な物だと思う。
[
もちろん、「神様」のこの「裁定」はあくまで無作為的なので、
しばしば残酷に思えるのも事実だが、、、。
]

最近では、二人に一人は癌になるそうだが、
要するに、それは（主に医学の著しい「発展」のために）
他に死ぬ機会が劇的に減っただけの話であり、
「癌で死ぬ＝天寿を全うする」ということの裏返しに過ぎない、
のだと私は思う。

それなのに、人間どもは、
この「神様からの授かり物」をやたらと恐れ、
忌み嫌い、撲滅しようと躍起になり、
その根絶の為に天文学的な金額と努力を注ぎ込んでいる。

専門的な詳細を端折って、ぶっちゃけて言えば、**癌は、**
生物自身のある細胞が、その寿命と分裂のリミッターを失い、
分不相応にやたらと増殖する様になった為、
その生物個体自身の生存にとって有害（そして脅威的）な存在になる現象
のことを言う。

でも、**これって正に、**
地球から見た人間供と一緒ではないのか？
つまり、
無節操に増殖および（経済などの）活動拡大を繰り返し
寿命を伸ばそうと躍起になっている**人間供は、**
地球から見たら「癌」に他ならない
のではないか？

本来ならば、人間供は
癌撲滅の努力なんか直ちに止めて、
その努力を自分達自身が地球の「癌」で無くなる為の努力に注ぐべきなのである。

追記（2018/12/12+13）：

今年のノーベル医学・生理学賞は、
癌の免疫療法の土台を確立された業績で
京大の本庶佑特別教授と米国のジェームズ・アリソン教授に授与された。

この様な「偉業」は、
生命科学の発展という観点からは驚嘆かつ敬服に値する。
しかしながら、その全人類への影響を考えると、
私は素直に喜べない、いや、むし嘆かわしくすら感じる。

何故なら、
この様に癌の治療法が次々と開発・発展していくにつれ、
人類がますます「地球の癌」に近づいていくからである。

私としては、
こういった医学の進歩と「真っ対局」にある、
「（子供を育て終えたら）（医術に頼らず）自然に死ぬ」
事を良しとする哲学、精神論を
全人類に広められる様な（老子やお釈迦様以来の）「真の偉人」に
一刻も早く登場して欲しい。

放蕩息子

江澤　潔　[初稿：2018/11/03; 改訂１：2018/11/04;
改定２：2020/10/17]

物語や落語などにはよく**「放蕩息子」**が登場する
（あるいは、かつてはよく登場した）。

「放蕩息子」とは、普通、親が真面目に（あるいは悪辣に）稼いだ金を
湯水の如く無駄遣いしまくる息子の事であり、
一般には、見習うべきでない例として登場する。
[
地方経済の活性化にはある程度貢献している様な気もするが、、、。(^^;)
]

でも、よく考えてみれば、
我々普通のヒトも、本質的には「放蕩息子」の様なものである。

我々ヒトは日常、
（火や言葉や文字から（スマホも含めた）コンピュータやインターネットやロボットまで）
様々な便利な物に囲まれて暮らしている。
そして、それらはすべて、
先人達が苦労してした発明や発見が積み重なって出来上がったものである。
我々は、それら偉大な先人達の「苦労の結晶」をのほほんと使って暮らしているのだ。
[
そして、偉大な先人達ですら、それ以前の先人達の「苦労の結晶」に頼って生きていた。
]

よく、「人間は偉大だ」とか「人間は素晴らしい」とか言う人々がいるが、
勘違いしてはいけない。
素晴らしいのは、それら偉大な先人達であって、
彼（女）達の苦労がなかったら、我々ヒトはそこら辺に暮らしているイモムシやネズミと
何ら変わらない、、、
、、、いや、むしろ、（生得の能力がない分だけ）我々の方が劣っているのかも知れない。

つまり、**我々ヒト個々人は、偉大な先人達の「苦労の結晶」を「食い物」にして生きている、**
いわば「放蕩息子」に過ぎないのだ。

更に言わせてもらうと、
我々ヒトは（産業革命以降は特に）、
（微生物や植物も含めた）**「ご先祖様」**達が何十億年もかけて作りあげて来た
「地球環境」および**「化石燃料」**等を**「無駄遣い」**して生きて来た。
従って、**生物種としても我々ヒトは「放蕩息子」なのだ。**

だから、決して、

他の生物達を見下したり傲り高ぶったりすることのない様に
気をつけたいものである。

ネズミ

江澤　潔　[初稿：2018/10/14]

築地市場が閉まり、その施設が解体され始めて、
ネズミの拡散が懸念されているらしい。

関係者達は、
ネズミは商品を荒らし、病原菌を運び、電線や回線をかじったりして迷惑だ、
と言う。

私が思うに、これは典型的な「いじめっ子の論理」である。
そもそも、
ネズミ達が拡散するのは、彼らが奴等の「生息地」を破壊したからであるし、
ネズミが繁殖したり病原菌を運んだりするのは、
元はと言えば、
そういった「不衛生な環境」を放置しておいた人間どもの責任である。
また、奴等が物をかじるのは、
伸び続ける歯の長さを短く保たなければ生きていけないから仕方なくやっているのであり、
別に「悪意」を持って「いたずら」しているのではない。
彼らは、
「ネズミが電線や回線をかじったせいで病院が停電になって救命器具が動かなくなった」
等と言うが、そんなの、かじられても平気な様に電線や回線に対策を講じたり、
予備回線や非常電源等を常備したりしなかった人間側の怠慢のせいではないか！

彼らは「ネズミは人類の脅威だ」等と真顔で言うが、
日々、アマゾン等の地球環境を破壊したりして
生物達の生息地を奪い続けている人間達に比べたら、
そんなの可愛いものである。

それに、あんなにイヌやネコは可愛がるのに、
同様にモフモフして可愛いはずのネズミをどうしてそんなに嫌がるのだ？
一度、ネズミをよく観察してみよ。
赤ん坊の様なそのつぶらな瞳や、
同じく、赤ん坊の様に両手で食べ物を持つ様などは、
あまりにもキュートではないか！

それもその筈、実は、進化的には、
ネズミ等げっ歯類は、
（ヒトが愛する）イヌやネコや（人気者の）パンダも含む食肉類よりも、

我ら霊長類とは「近縁の親類」なのである。

我々ヒトは、
奴等「近縁の親類」達を無下に嫌がるのはやめて、
奴等も含めた地球上のすべての生物達ともっと平和に共存出来る様に
考え方と生き方を改めるべきなのである。

チョウ（蝶）とガ（蛾）

江澤　潔　[初稿：2018/10/15; 改訂１：2020/10/17]

ある初秋の昼間、
チョウ（蝶）が二匹、たわむれながらヒラヒラ舞っているのを見つけた。

たしか、
どこぞやの詩人が「二つ折りの恋文」と描写していた様な、、、。

チョウは、昆虫のなかでも珍しく、老若男女に人気がある。
それは、
（ちょうど今の様な）穏やかな明るい昼を想起させるからかも知れないし、
その翅の美しさのせいかも知れないし、
また、そのヒラヒラ舞う様が（まるで桜の花びらが散る様で）
命のはかなさを感じさせるからかも知れない。

一方、同じ鱗翅目に属する昆虫でありながら、
ガ（蛾）は（東宝の怪獣「モスラ」を除くと）概して嫌われ者である。
それは、（チョウとは対照的に、）
暗い夜を想起させるからかも知れないし、
その翅が地味もしくは毒々しいからかも知れないし、
実際に「毒を持つ」者が多いイメージがあるからかも知れないし、
また、胴体が概してブットいからかも知れない。

実際には、オオミズアオの様にチョウにも劣らず綺麗なガもいるのではあるが、、、。

さて、
チョウは人気者であるが故に、
ヒトに見つかるとよく捕まって「標本」にされてしまう。
一方、
ガは嫌われ者であるが故に、
ヒトに見つかるとよく殺虫剤等で殺されてしまう。

、、、なんだ、結局、「殺される」んじゃないか、、、。

、、、願わくば、どちらを見つけても、
そっと通り過ぎるか、逃がしてやるか、
飛び去るまで優しく見守ってやって欲しいものである。

さて、
成虫ではこの様に人気に圧倒的な差があるが、
幼虫はどちらもイモムシか毛虫であり、
多分、（オオムラサキの様な例外を除くと、）
嫌いな人達の方が多いのではないかと思う。

ちなみに、私はどちらもその仕草が愛らしいと思うのだが、
流石に毛虫は（毒がある場合もあるので）素手では触らない様にしている。
[
実際には、「緊急事態」以外は、
虫一般は（弱らせない様に）素手で触らない様にしているのだが、、、。
]

これらイモムシや毛虫が蛹（サナギ）になり、
さらに羽化して成虫が出てくる様は、
まさに「生命の神秘」を感じさせるイベントである。

言ってみれば、奴らは、
「一度死んで、また甦（よみがえ）る」
的な事をしているのである。

確か、数年前の Genome Research に載った論文で、
この「完全変態」にまつわるゲノム（または遺伝子経路／ネットワーク？）
の働きが解明された、
とか言っていた。
最近の生命科学の発展の早さには驚かされるばかりである。

チョコフレーク

江澤　潔　[初稿：2018/09/29]

昨日、非常〜〜〜に悲しいニュースが飛び込んできた。
あの、チョコフレークの製造中止が決定したと言うのである。
そう言えば、半年ほど前にも、北欧に嫁いで行った友人が
カールが市場から消えた事を話題にしていた。

これら「昔懐かしの味」が市場から消えていくのは非常に寂しい限りであるが、
これも時代の流れというものであろうか、、、。

そう言えば、
チョコフレークの製造中止の理由の一つに、
「チョコフレークでベトついた手ではスマホを操作出来ない」
というのがあったのだが、私は
「もう少し待ってみれば良かったのに、、、」と思った。
もう少しすれば、今度は wearable device（装着可能機器）や音声認証等、
そもそも指を触れる必要もなく操作できる機器が主流になる可能性もあるからだ。

「市場から消えないうちに」と言う事で、
今日は早速、スーパーのお菓子売り場でひっそりと陳列されている
チョコフレークをゲットした。
本当は、歯が痛くなったりするので、
最近はほとんどチョコレートは食べなくなっていたのだが、
少なくともこれから数日は、この「昔懐かしの味」を
久しぶりに味わってみるつもりである。

[
追伸：私特有の性向かどうかは定かではないが、
普段はそれ程「その物」を気にしていないくせに、
「終わる」と聞くと妙にそれが惜しくなってしまう、
というところがある。
]

不正

江澤　潔　[初稿：2018/10/06; 改訂１：2018/10/07;
改定２：2020/10/17]

小さいところでは、
テストでの「カンニング」、研究論文での「データ改ざん」、芸術作品の「盗作」、
就職の際の（照会者の）「虚偽証言」（positive/negative 両方含む）、
企業の「データ改ざん」、政府の「文書隠蔽／改ざん」など、
「不正」は、現在日本でも蔓延しているが、今に始まった事ではない。

「不正」も、つまるところは**「嘘」**もしくは**「不正直」**に帰着する事を鑑みると、
それは**「建前」**と似ている。
しかしながら、「建前」はたいてい社会的に容認される、
あるいはそれどころか（暗黙に）推奨される事も多いが、
「不正」は（少なくとも建前的には）社会的に容認されることはない。

それにも関わらず、「不正」は繰り返される。
これはどうしてなのだろう？

（「公金横領」などの「盗み」を除くと、）
大抵の「不正」は
「自ら（あるいは関係する人／物）の実力や品質を実際以上に良く見せる」という「詐欺行為」であり、
それによって、政府や社会の承認や名声等を得ようとする。
そして、多くのケースでは、大きな金額や利権が絡んでいる。
つまり、どうやら、**人間の「欲」**が原因にある様だ。

この様な「不正」は、いかなる動機が背景にあるにせよ、
公正な競争が歪められるので、本来は絶対に起こしてはならない事である。

私自身は、**「真実」を追求する「科学者」**として、
その様に自分を偽ってまで競争に勝とうとする人々の気持ちは分からない。
何故なら、
データ改ざん等は、研究者として決してしてはならないし、それに、
その様な競争はあくまでも「相応しい者」を同定／選出する為に行われるのであるから、
もしその様な「不正」をして、例えば大学入学や教授職等を勝ち取ったとしても、
それは「分不相応」な「身分」であるから、その後苦労する事が明らかだからだ。
[
「嘘から出た真」で、その後、その人物が相応しい者に「化ける」可能性がなくもないが、
その様なケースはごく稀であろう。
]

それは、**企業や政府等によるもっと大きな「不正」**でも同様である。
政府が国民を欺く事など決してあってはいけないし、
企業が商品の品質に関して消費者をだますことも本来はあるべきではない。

しかしながら、概して、人間は弱い生き物である。
もしも大きな金額や利権が左右され兼ねない状況で、
しかも、「きっとバレないのではないか？」と予想される場合には、
つい「魔が差して」しまう事もあるのかも知れない。
[
そして、大抵そういう場合には、**組織ぐるみでの「同調圧力」**が働いて、
「赤信号、みんなで渡れば怖くない」と言った心境になるのかも知れない。
]

「不正」を確実に摘発できる仕組みができない限り、
各自の**「良心」**に委ねる事しかないので、
恐らくは、ニュース等で報道されている「不正」は**「氷山の一角」**に過ぎないであろう。

私は、研究現場における「不正」はほとんど日常茶飯事ではないかとすら疑っている。
研究現場における「不正」は、大抵、PI （principal investigator、主任研究員）に
大きな権限がある事が原因である、と私は思う。
学生や研究員は、PI に気に入られなければ、即座に「クビ」になり、また、
その後の進学／就職活動の際に妨害される可能性がある。
その為、（本庶佑さんも宣った様に「（基礎）科学で「当たる」のは稀である」のにも関わらず、）
PI に反論したり、PI の望み通りの結果が出なければ、その学生／研究員はPI から睨まれ、
その研究人生は「終わったも同然」となり得る。
[
実際、私は似たような状況に度々追いやられた。
]
それを恐れて、学生／研究員は、PI の望み通りになる様に結果を「改ざん」する事が

多くあるのではないか？
と、
世の学術雑誌は（tier one も含め）どうも**胡散臭い論文**で溢れている様だという**「事実」**から、
私は疑っているのである。
[
もちろん、PI の中には、科学の発展に誠実な方々も多い。
その様な先生方は、反論や自らが狙ったのと違う結果は、むしろ歓迎し、真剣に向きあう。
つまり、**部下からの反論や自らが狙ったのと違う結果こそが、PI 達の「試金石」となり得る。**
]

従って、**研究現場における「不正」を劇的に減らす為**には、
（事実と違った「ゆがんだ照会」等による権力者達の介入の可能性を防ぐ為に、）
進学や（とりわけ）就職の際の応募者の「資質」の評価を完全に公正かつ客観的に行える様なシステムを構築する必要があるであろう。
そして、現在公募している様な PI の職だけでなく、**「平の」研究員**も
その様な評価システムに従って**（準）公的な機関で雇い**、
PI に貸し出す（あるいは派遣する）ような形にすれば、
学生や平研究員が PI から不当な圧力を受ける機会はほとんどなくすことが出来るだろう。

しかしながら、研究者の「資質」の完全に公正かつ客観的な評価というのは、
そう一筋縄ではない。
試験をすれば、知識や技能、あるいは読解力や論理的思考力等を測る事はある程度できる。
しかしながら、**研究は本質的に「創造的」な作業**であり、
試験だけで**「創造力」**を測るのは難しい。
その人が発表した論文のリストからある程度は推し測れるかも知れないが、
それも完璧ではない。
何故なら、今では共著論文が当たり前であり、
その人が論文にどの程度＆どの様に貢献したかは完全には分からないからだ。
[
求めても、本人や共著者が正直に申告するとは限らない。
]
更には、共同研究では、単に創造力だけではなく、
共同研究者達をまとめ上げる「統率力」や適切に協力する「協調性」等の**「人間力」**
も必要になる事も多いだろう。
それら異なる様々な形質を、
いかに**「研究者の資質」を測る一つの客観的な「物差し」**に変換して較べるか？
は、一筋縄ではないのである。
[
これは、公募職の現在の審査現場でも恐らく当てはまる事だと思うが、、、。
]

とはいえ、
もしもこの様に**研究者の「資質」の完全に公正かつ客観的な評価が実現できれば、**
研究現場における「不正」は劇的に減るであろう。
同様な事は、**研究助成金**の審査等にも当てはまる。

真の利他的行為

江澤　潔　[着想：???; 書き下ろし：2020/10/14]

古今東西、一般的に、
「利他的行為」の方が**「利己的行為」**よりも
尊ばれ、称賛され、また（少なくとも他人からは）好まれる傾向にある。
そして、
この傾向は、この日本においては顕著である（特に一昔前までは顕著であった）
様に思われる。

だが、よく考えて見ると、
何を以って「利己的」と「利他的」を分けるのか？
不明確な点も多い。

これについて少し考えてみよう。

先ず、
親が自分の子供の為に犠牲になる行為について考える。
この類の話はよく「美談」として物語になったり語り継がれたりするものだ。

しかし、
ここに「遺伝学的」（あるいは「進化学的」）な観点を導入すると、
かなり違って見えてくる。

遺伝学的（あるいは進化学的）には、
各々の子供は親のゲノムの半分を受け継いだ、
いわば「（半分）分身」の様な存在であり、
できる限り子供達を生き残らせる事こそが親の「目的」となる。
つまり、遺伝学的（あるいは進化学的）には、
子供の為に親が犠牲になるのは、
単に**「自らの目的を果たす為」**にやっている行為に過ぎない。
そして、もしその行為によって、
（類縁関係が遠い）他者が不利益を被るなら、
それは正に「利己的行為」と言える。
[ただし、血縁関係のない里親や継親が子供の為に犠牲になるのは
話がだいぶ違ってくる。]
同様に、
血縁家族内での助け合いも、広い意味ではこの範疇に入る。

次に、
血縁関係の全くない人々が集まった「チーム」の為に犠牲になることを考える。
この「チーム」は、会社や組織、団体等、
なんらかの目的の為に構成された複数の人々の集まりなら何でもいい。
「チーム」の「利益」の為に個人が犠牲になるのは、
ここ日本ではよくある話で、ある意味、（暗黙の）「規範的行動」とさえ言える。

しかし、もし、「チーム」のその「利益」が
他の「チーム」（あるいは社会全体）の「不利益」に結びつくとしたら、
それは結局、
「自分達さえ良ければ、、、」

という、**「拡張された利己的行為」**に他ならない。

良く見る例としては、
企業（や役所）のデータ（や文書）の捏造、改ざんの事件等がそれに当たる。
が、それだけに止まらない。
この**資本主義の「競争社会」**においては、
そして、とりわけ、現在の様に**「パイの拡大」がほとんど望めなくなった状況下**では、
一つの「チーム」の（特に著しい）「利益」は、
他の「チーム」の「不利益」の上に成り立っていることが多く、
従って、その様な「利益」に結びつく行為は全て
（、仮にルールに則ってやったとしても、）
「拡張された利己的行為」と見なされるのかもしれない。

この、**「拡張された利己的行為」**の概念は、国レベルにも拡張される。
「自分の国さえ良ければ、、、」
という、
「行き過ぎた愛国主義」は、まさに「拡張された利己的行為」の一種である。
（それがあまり好ましくない事は、
米国のトランプ政権の振る舞いを見ていても、
あるいは第二次世界大戦前の（日本も含む）列強のとった行為
（およびその「結末」）を考えても、
明らかだろう。、、、反論する人もいるかも知れないが、、、。）

それでは、
人類全体の「利益」になる行為はどうだろうか？
私が思うに、
この際にも注意が必要である。
もしも、
その「利益」が、短期的な視野に立ったもので、
「将来世代」の「犠牲」の上に成り立つものだとしたら、
それも結局、
「（今を生きている）自分達さえ良ければ、、、」
という、
一種の（時間的な）「拡張された利己的行為」とみなせるだろう。
それに、
この地球は我々人類だけのものではない；
人類以外の、何百万、何千万種といる他の生物達も、
我々同様にかけがいのないこの「地球」の「住民」なのだ！！
だから、もし、
ある行為によってもたらされる人類全体の「利益」（あるいは「発展」）が、
同時に
他の生物種（あるいはひっくるめて「生態系」）の「不利益」（あるいは「衰退」「破壊」）
も引き起こすのであるならば、
それは、
「人類さえよければ、、、」
という、
一種の「拡張された利己的行為」だと言える。
[
そして、これは、前記した「（今を生きている）自分たちさえ良ければ、、、」
という考えと、ほぼ同等だと言える。
何故なら、人類も結局は、健全な生態系があってこそ健全に存続しうるからだ。

]

こう考えて見ると、
「真の利他的行為」とは、

地球上の環境や生態系および人類全体の恒久的な保全を目指して、
ある特定の個人や団体（あるいはカテゴリー）だけに偏った利益を
生み出すことのない様に注意しながら、
自らを犠牲にする行為、

ということになりそうだ。
（注：人類が地球上に溢れかえった今となっては、
「発展」はまず必ず将来世代の「犠牲」を伴うので、「保全」としている。
　そして、生態系の保全のためには環境の保全が欠かせない。）

これ以外は、
個人レベルでの単なるわがままも含め、
まあ、言ってしまえば（「（拡張された）利己的行為」という意味では、）
五十歩百歩である。

とりわけ、**今、我々人類は、**地球上に溢れかえり、
その軽率な行動がすぐに環境や生態系に悪影響を及ぼす程までになっており、
それでいて、一応「行動の帰結」を考えられる頭を持っているのであるから、
地球（あるいは環境や生態系）の将来に対して、
他の生物種達よりもずっと重い「責任」を担っている、
と言えよう。

今、我々に求められているのは、
そういう「責任」を十分自覚した上で考え、行動する
ことなのである。